（一九）三〇年代のフランスについて（一）

平田好成

「大量弾圧と無法に対してスターリンの罪は巨大であり、許すことはできない。」
ゴルバチョフ旧大統領、八七年一一月二日、一〇月革命七〇周年記念演説で。

一　三〇年代のフランス人たち

停滞する人口学　三一年に、フランス人たちの数（四、一六〇万）は、一一年に、数（四、一三〇万）に反して、極く僅かしか異なっている。三九年に、フランスは、四、二〇〇万の住民たちの入口に達しなかった。フランスの人口のこの停滞は、出生率の執拗な低下によって説明される。

・出生率の弱さ。出生率の比率は、二六―三〇年に一八、二‰から三六―三八年に一四、八‰まで（六〇万以下の出生）弱まる。三つの相次ぐ要素は、この現象を報告する。最初に、家族をその子供たちの数を減らすのに到らしめる。マルサス主義の心性。いずれにしても、唯一の子供は、決まりになる傾向がある。第二に、『兵役適齢者（労働力人口）の少ない年度の現象。』最後に、結婚の敏感な減少（二六年と三〇年の間に三四万に反して三〇年と三八年の間に一年毎に二七万六、〇〇〇）が、表す、三〇年代の経済的不景気の結果は、付け加わる必要がある。

・平行して、死亡率は、減らす、そして、この観点から、危機は、この低下に作用を及ぼさない。死亡率の比率は、二六―三〇年に一六、八‰から三八―三九年に一五、一‰まで移る、失業と耐乏生活は、結局、衛生と医学の進歩の追跡によって埋め合わされた。それでも、死亡率の発展が、出生率の低下の結果を決して取り消すのに達しないことである。三五年から三九年まで進む、年月は、誕生について死亡の超過によってマークされる。世代の取り替えは、保証されない。

・もし、フランスの人口（〇一年、三〇歳（男女たち）のくぼみ、三一年、三五歳から五五歳まで男たちのくぼみ、すなわち、一一―一六歳の区切り（男女たち）が、減少しない、しかし、微かに増加し続けるならば、フランスの人口は、取り替えを外国の移住に負うている。外国の移住は、外国人たちの重大な数の出発を引き起こした。経済的諸困難と失業によって、三一年と三六年の間にブレーキを掛けられた。外国人たちは、三一年に二七〇万であった、彼らは、三六年に二二〇万である（帰化は、もっと多数であった）。しかし、三六年から、及び四〇時間法の結果に応じて、人々が、外国の移住の再開を目撃するように思われる。その再開は、世論の外国人嫌いの反応を引き起こす。結局のところ、三〇年代の間、それは、フランスの人口学の総括以外には不安にする総括である。人口は、停滞するのみならず、フランスは、老人の国になる。現象は、実は、経済について及び心性について重大な結果をもたらす。フランスの人口学は、常に第一次世界大戦のショックの重みを蒙るように思われる。活力のない、フランスは、外国人から生ずる、すべての問題を考察して、寒そうに自分の中に閉じ込もる。

・遅ればせの人口学の政策。公権力のように、世論は、人口減少に反対して、危険の極く僅かの意識であることを示す。出生率の低下に反対して闘争するため、取られた唯一の措置は、避妊を考慮してすべての宣伝を抑止する及び流産の抑止を強調する、二〇年七月三一日法である。家族の手当のサラリーマンたちへの帰属の決定を予測する法が、可決されるため、三二年を期待する必要がある。労働者たちの新しい集団に対して家族の手当の利益を拡げる及び累進性の方向の中で給付の比率を調整する、三八年一一月の緊急政令で、次いで相続、課税及び手当に関して、色々な現存の措置を取り戻す、

いわゆる家族法典という、三九年七月二九日の緊急政令で、真の人口学の政策は、準備させる。

農民の国　都市の圧力の神話　初めて、三一年の人口調査は、都市の人口が、フランスに、農村の人口を追い抜くことを取り上げる。四八、八％に反して五一、二％。三〇年代の中で、フランスの伝統的諸構造の変更の前に、不安は、田舎を際立たせるあり余るほど豊かな文献を育む。実際には、都市の圧力は、大いにニュアンスを与えられるはずである。別の工業の国々の中によりはるかにもっと遅ればせの、都市の圧力は、一〇年間苦しめる、恐慌によってブレーキを掛けられる。諸都市は、単に、一〇年にある一〇万の住民たちを獲得する。更に、二、〇〇〇以上の住民たちの大都市圏は、多数の農村の大きい村を含む。二、〇〇〇から五、〇〇〇の住民たちまで『諸都市』の中で、活動は、しばしば支配的になる。もし人々が、フランスの労働力人口を観察するならば、現象は、なおもっとはっきりしている。三六年に、フランス人たちの三六％は、第一次産業部門（農民たちは、多数派である）の中で働く。第二次産業部門の中で三一％と第三次産業部門の中で三三％に反対して、フランス人たちの多数派は、田舎の活動の方に格好のよいままである。人口学の及び経済のデータは、なお心性の研究によって確認される。多数の都会人たちは、なお彼らの両親、彼らの祖父母あるいは田舎に対して彼らの近い家族を持っている。彼らは、彼らが、自分を通過の、故郷と縁が切れた人々と見做した、都市でもっと自分が彼らの生まれた土地で結び付けられたと感じる。都会人たちの間の大部分が、育む、夢想は、田舎に戻ること、田舎に彼らを退職することである。その結果、多数の都市の住民は、農民に留まるし、そのようなものとして反応する。都市は、なお三〇年代のフランス社会の中で、国民的心性及び伝統的価値に縁のないように判断された、いささか二義的な現象である。

小所有者たち―経営者たちの世界　これらの農民は、フランスを小所有者たち―労働者たちの民主主義として描く、権力の言説が与える、イメージに対してますますはっきりと答える。共和制の公式の政策は、平均的な家族の所得の強化の方向に進む。不動産銀行の貸付け金、在郷軍人たちに与えられた特別の貸付け金は、経営者たちによって土地を買い戻し

を優遇する。人々は、三〇年代の初めで、経営者たちの四分の三が、所有者たちになることは、確認する。経営者たちのグループは、一〇ヘクタールから五〇ヘクタールまで平均的な開拓地のグループである。一〇〇ヘクタールより上の、大きな開拓地の数のように、一〇ヘクタールより下の、小開拓地の数は、減らす傾向があるのに。もし開拓地の平均的な表面積が、僅かに増加するならば、その表面積は、二九年に、単に、なお少し八ヘクタール以上である。土地の独り占めの恐怖、『下積みの人間』の崇拝は、フランスの農村世界の中で、諸政府のイデオロギーの意思及び世論の熱望を満足する、しかし、単に、フランスの農民たちに対して、並以下の経済的生活を可能にする、そして農民たちを絶えず脆弱な状況に置く、所有の多様性を作り出す。自作農に経営された、これらの平均的な所有について、農民たちの最初の目的は、自家消費である。この事実から、多角栽培は、習わしである。結局は、開拓地の小さ過ぎるサイズは、決して、機械あるいは肥料の収益化を可能にしなかった。同様に、たとえ第一次大戦前に比べて、近代化の進行を注目する必要があるにしても（草刈り機は、広がる、数十万の機械播種機と刈取結束機は、存在する、しかしトラクターの数は、第一次大戦の直前に三万五、〇〇〇を越えない）、隣りの国々の農業に比べて、遅れは、印象的になる。確認は、肥料の消費について同じ確認である。これらの色々な要素は、小麦あるいは雌牛によって牛乳の生産が、問題である、農業の成績に関して、フランスを隣りの国々から遠くに置く、農業の収穫高の重要な弱さを説明する。原価が、世界の相場よりもっと高くなるので、保護貿易主義は、フランスの農民たちについて不可避性になる。経済恐慌が、生ずる時、極く僅かの開拓地は、恐慌に抵抗できる状態にある。疑いもなく、この全体の表を修正する必要になった。フランスの農業は、古風及び凡庸さの中ですべて釘づけにされない。フランスに、有利にヨーロッパの最も近代的な農業諸地方に比べられ得る、資本主義的型の経済に対して転換された諸地帯が、存在する。パリ盆地の中央の及び北の大きな穀物の平原、多数の農業労働者によって栽培に置かれた小作に大きな開拓地でノール県の地方、彼らの野菜の開拓地で『ブルターニュの金色のベルト』、ラングドックのぶどう栽培地。しかし、多角栽培及び自給自足体制を実践しながら、並以下にほそぼそと暮すのに捧げられた、そして『小さい独立心の

強い人』の社会的理想の具体化になる、不十分なサイズの開拓地の組織網の中で、輝かしい例外が、単に、問題である。

生活諸条件の遅い近代化　もし農村世界の経済的諸条件が、極く僅かに発展するならば、生活の諸条件は、かなり敏感に変化する。確かに、踏み固められた土間は、今後、窓ガラスあるいはコンクリートのタイルで覆われる、しかし、居心地の悪さ、老朽は、農民の家の基本的な諸性格に留まる。水道設備は、稀である。井戸は、常に水に食料品の主な根源である。それに反対して、三〇年代の間、二八年から企てられた農村の電化の綱領は、漸次的にフランスの村落の全体を獲得する。より重要な事実は、長距離バスが、農村の交通機関の組織網を補充して、今後、村の集合体の最も大部分を通じている、地方的利害の鉄道の線の増加によって、農村の世界の隔壁の除去である。この田舎の開通は、農村の生活の様式をますます都市のモデルに従うのに至らしめる。この変化は、多様化する傾向がある、食料品の領域の中で敏感である。肉、卵、バターの消費は、当時まで農民の食料品の基礎を構成した、パンとスープの消費を犠牲にして増加する。なお、服について都市の影響は、もっとはっきりする。流行のカタログは、田舎の中で浸透するし、農民たちは、都市に彼らの服を買うため、地方的慣習あるいは仕事着を放棄する。古い農民の伝統が、都市の世界からやって来た思想に対して歩調を譲歩して、心性それ自体は、発展する。田舎の祝祭、農民の夜の集いは、減少する、宗教的信者の勤めは、ある地方の中で弱くなる。新聞あるいはラジオは、国民的討論の反響をもたらすのに。田舎っぽさは、生き生きとした現実になるように止める。田舎っぽさは、共同の記憶の対象になる。前兆となるやり方で、地方的特殊性の紛失と風習及び慣習の統一は、地方分権主義的運動を、郷土的結社を及び三七年に全国的民衆的美術＝伝統館の設立を生む。もし農村世界の慣習が、心性を浸透するならば、それは、三〇年代のフランス社会の活力を具体化する、都市のフランスである。

都市のフランスの活力　諸都市の中で服と生活様式の相対的な統一を観察して、民族主義的作家M＝バレース Maurice Barrèsは、二二年に、『もはや諸階級は存在しない』ことを宣言した。もし人々が、都市の世界の驚くべき多様性を考察するならば、少なくとも大雑把なヴィジョン。ブルジョワジーと労働者世界の定義された特徴に対して、二つのグループ

の間に、中産諸階級のぼんやりした輪郭に対して、世界は、急速な膨張を知っている。中産諸階級は、社会のマルクス主義のヴィジョンが、摂取する、対立を再び掛かり合いにして、社会の基本的グループ、すなわち、別の二つの階級の間の関係になる。

ブルジョワ＝フランスの多様性　三〇年頃、フランス人たちの約四、二〇〇万について、人々は、農民たちの一、四〇〇万、労働者たちの一、三〇〇万及び『ブルジョワたち』の一、四〇〇人を見付ける。この最後の集団は、広い意味で理解される。この集団は、大ブルジョワジー―銀行家たちの、大工業家たちの、大所有者たちの、上位の卸売の集団及び経営者―、実業家たちの、自由職業のメンバーたち（公証人たち、弁護士たち、医者たち）の及び上級のサラリーマンたち（技師たち、士官たち、教授たち、高い地位の官公吏たち）の中ブルジョワジー、最後に小商人たちの、職人たちの、小官公吏たち、等の形成された、小ブルジョワジー（あるいは中産階級）を再編成する。さて、これらの色々なグループの間に、所得あるいは生活様式の重要な差違は、実在することは、明らかである。上あるいは中ブルジョワジーの中で、中ブルジョワジーの中であるいは中産諸階級の中で、分類は、純粋に主観的な判断の結果として生じる。この『ブルジョワ＝フランス』は、ブルジョワジーとプロレタリアートの間に、大雑把な分類が、仮定したよりもっと複雑な社会である。

大ブルジョワジー　彼の全体の中で、ブルジョワジーと同様に、大ブルジョワジーは、現実の均質性で呈示しない。疑いもなく、大ブルジョワジーは、支配するグループが、経営者、すなわち、工場、銀行、鉱山、建設すべき土地、等の所有者のグループである、指導階級を構成する。この財産のエリートは、二〇〇のもっと富裕な株主たちのグループを形成して、フランス銀行の会議に本拠を置く。ただ、株主たちは、投票権及び特に国の経済的及び財政的政策について基本的重みを重きをなす、理事たちを保持する。株主たちは、新聞の多数の機関紙について決定的な影響を行使するし、この事実から、世論の部分の形成の中で決定的な役割を演じる（製鉄業者フランソワ＝ドゥ＝ヴァンデルは、二六年以来、ジュルナール＝デ＝デバ（討論新聞紙）の主な株主であり、製鋼業協会は、二九年以来、ル＝タン紙に出資する）。株主たちは、最後に、国家

の大高級官僚、すなわち、財務監督局、会計検査院、国家参事院の内部に代表される。この経営者は、第一次大戦の間、軍隊の装備及び市民の消費の不可避性によって刺激されたその活動を見た。紛争の年月の間、発展する、大衆的生産は、再建及び有利な情勢の不可避性の事実から当然、三〇年までその延期を見付ける。

近代的な経営者　ある数の勇敢な経営者たちは、生産の機構を近代化するよう努力するため、この情勢を利用したし、アメリカの方式を適用する。それは、自動車産業の中でシトロアンあるいはベルリエの、繊維産業の中でアルセル＝ブサクの、化学産業の中でルイ＝ルシュールの場合である。この経営者は、保護された内部の市場について古い折り畳まれた産業を犠牲にして、労働力と資本を引き付けて近代的産業を発展するように見える、フランスの産業化の中で先駆的な役割を演じる。経営者は、アメリカ人たちに対して、彼らの労働の方式（加工の合理化、テーラー＝システム化……）、信用に対して訴えに、広告の利用に関して、彼らの思想、彼らの生産至上主義の崇拝を借りる。集中は、大きい構成単位（ルノーあるいはシトロアン自動車工場、ニョーム＝エ＝ローヌ航空機工場……）の中で生産の技術的な集中は、あるいは有価証券会社のゲームによって発展する、財政的な集中は、問題である、習わしになる。集中は、富裕な機関の支配をはっきりするように見える、銀行の産業部門（リヨン銀行、ソシエテ＝ゼネラル、パリ全国割引銀行、パリ連合あるいはパリーオランダ銀行）のように、もっと伝統的な産業部門、あるいは配分の商業の産業部門を獲得する。実際、もし大百貨店が、繁昌し続けるならば、二つの新しい方式は、多数のチェーンストアーの方式及び大百貨店の管理の下に発展する、チェーン－民衆の客を獲得するのに当てられる、『モノプリ』と『ユニプリ』－の方式をそれらの姿を見せる。『アメリカ風に』これらの企業の活力にあふれた経営者たちにとって、近代化は、絶対的な不可避性である。以上のことから、三〇年代の初めに、第二次産業革命の技術的進歩の一般化。石油の電気の、軽合金の、アルミニウムの、総合の化学の利用。それは、科学的に生産を組織するよう、恒久的な不安が、伴う、機械の支配である。要するに、この経営者は、国家が、戦争の直後に形成を奨励した、及び圧力団体に構成されるため、権力の後見で解除した、フランス生産総同盟の内部に集まる。圧力団体の内部に、

近代的経営者たちは、特に経済が、フランスの外交の態度を利用できる、バルカンの場所の中で、対外市場の征服の政策を押し付けるよう試みる。そのように、リヨン銀行とパリ連合銀行によって支持された、製鉄業者シュネーデルは、自分をチェコスロヴァキアにスコダ工場の、ルーマニアにアルミニウム工場の、ポーランドに軍需機器製造所の支配者にし、等、オーストリア帝国の後継者たち、すなわち、諸国家の中で、組織的定着の戦略を発展させる。

フランスの企業の組織の維持された古風な表現　もし三〇年代の中で、活気にあふれた経営者の存在が、現代人たちを驚かしたならば、それは、経営者が、フランスの経済の全体の状況と対照をなすことである。フランスの経済は、一九世紀の構想によってマークされたままであるし、ある先駆者たちの斬新さは、フランスの企業の一般的な古風な表現を包み隠すはずではない。全体として、そして同時に長い日付で集中を知っていた、産業部門の中で、新しい経営者の生産本位主義のイデオロギーは、フランスのブルジョワジーの伝統に縁のないように見える。フランスのブルジョワジーは、経済的レヴェルについて形成されない、革新を信用しない、単に、いやいやで銀行融資に訴える、そんなにブルジョワジーは、その独立を失うように酷く恐れる。結果として、ブルジョワジーは、極く僅かに投資するし、恐慌の前夜に、フランスの産業機関は、老朽化した。三〇年代の間、機械の平均的年齢は、ドイツに七年と日本で四年に反してフランスに二〇年である。その結果、フランスの企業の最大部分を国際的浸透を対立させるように、従って輸出するように無能にする、高い生産の費用になる。経営者の大きな不安は、同様に組織に対して、無気力状態に対して奨励となる、関税の保護の有効な組織を制定しながら、全国的市場について外国の浸透を回避することである。これらの条件の中で、産業部門で希望するように、利益は、貧弱である。そして、人々は、貯蓄が、産業の投資の方へ向かわないで、公の資金の方へ向かうことは、想像する。動産は、全国的生産に対してではなく、公の財政に対してその所得の主要な大部分を要求する。経済的産業部門の大部分は、従って、近代化の周辺に留まる。結局は、フランスは、三〇年代の初めに、中小企業の国に留まる。たとえ大企業（五〇〇以上のサラリーマンたちの）が、三一年に、フランスの企業の二六、六％を代表して、急速な発展を知っ

ているにしても、それは、フランスの産業組織（フランスの企業の四九、八％）を支配する、一〇〇以下のサラリーマンたちの小企業である。同様に、フランスの経済の支配的特徴、すなわち、高い生産の費用、信用への弱い訴え、投資の準不足、活力の全体的不足は、結局、ある意味で、厳格な保護を要求するし、経済の近代化を遅らせる、小企業の数の急激な増加によって釘付けになった。もう一度、経済の冒険家たちの少数派を除いて、投機の危険と活動の近代的形態から遠く、まともな仕事で生活している、小所有者たちの民主主義の賞賛は、フランス人たちの多数派のヴィジョンを報告をする。

ブルジョワジーの生活様式　第一次大戦以降、生活様式の画一化にも拘らず、ブルジョワの生活様式は、労働者の生活様式と混同され得ない。相違は、ちらと見て直ぐに、街頭の中で、服に見られる。彼の『無帽で』妻で、ハンチングを付けた労働者に対して、帽子を付けたブルジョワたちは、反対する。住居のレヴェルに対して、同じ確認。アパルトマンあるいはブルジョワの家は、近代的設備の意図を表す。中央の暖房、浴室の存在は、日常生活の進歩をマークする。家の支配者は、仕事をしない。彼の役割は、家の立派な切盛りに注意を怠たらないことである。三〇年代の初めに、このブルジョワジーは、ラジオの部署と自動車を所有する義務がある。三〇年に、一一〇万以上の車は、フランスに走る。自動車で、諸都市の外に逃避の趣味は、発展する。ある保養地は、重大な流行を知っている。ブルジョワは、同様にスポーツをするため、十分な余暇と所得を自由にする、ブルジョワである。フランス一周自転車競走は、群集を熱中させる、等。要するに、ブルジョワの生活様式、それは、多分、ブルジョワの教育である。同時に厳格な意味で教育と、『慣習』に関して法規化されたある数の規則の知識を含む、複雑な全体。教育に関して、教育は、バカロレアの入手、すなわち、真の『ブルジョワジーの免許』を推測する。このブルジョワの生活様式は、大実業ブルジョワジーの特性であるのか。疑いもなく、やり方は、ブルジョワの生活のモデルを提供するし、やり方は、高い暮し向きの財政的手段を所有する。しかし、別のブルジョワジーのグループは、このモデルについてグループの態度を真似る。住宅は、豪華ではない、使用人たちの数は、時折、単なる『家政婦』に変える、自動車は、単に、五課税馬力になるし、子供たちが、バカレロアに到達するため、犠

性が必要となる。中産階級の下の諸階層の中で、人々は、真の実際の体験よりもっとブルジョワの生活への熱望を見付ける、しかし、これらのグループの全体のため、モデルは、決して異なっていない。それは、ブルジョワジーが、三〇年代のフランス社会の大部分を含ませる、漠たる集合状態であるということである。

フランスの『中産階級』の役割と独創性　・不正確な限界への世界。上位のブルジョワジーと労働者の世界の間に、あらゆる一連の中間の社会的グループは、存在する。われわれは、そこで『中産諸階級』の曖昧な世界に関係がある。用語それ自体は、現実のぼんやりした性格を表す。事実、階級的用語は、誤った幻想を抱かせるはずではないし、ここで研究された対象は、マルクス主義者たちが、この名前で指摘する問題とは関係がない。これらの集団のメンバーたちの間に、いかなる連帯は、生産諸関係のレヴェルで存在しない。経営者たちは、そこでサラリーマンたちと隣り合う。所得のレヴェルで、もっと多くの均質化ではない。どんなレヴェルから、中産階級の中であるいは社会の上級の諸階層の中で、人々が、含まれることは知っているよう試みることは、無駄である。要するに、もしブルジョワの生活様式への熱望が、事実、中産階級の特徴であるならば、何らかの生活様式の構成単位は、中産階級を特徴づけるように可能にすることは、はるかに不足である。中産諸階級の世界は、異質の世界である。人々は、非常に異なった二つの集団を識別しない。独立した中産階級と給与を受ける中産階級か。第一のグループは、商業の、工業の、職人の小経営者たち（更には大量の農業の中小所有者たち―経営者たち）を、しかし同様に、独立した労働者たちと自由職業のメンバーたちの大部分を取り戻す。第二のグループの中で、人々は、大量の商業の及び工業のサラリーマンたちと管理職たちと、急速な数的増大で、官公吏たちのグループを見付ける。これらの色々な集団の間に、人々は、共通の基本要素を無駄に試みることは、明確である。『中産諸階級』の国境は、極端に不正確で及び主観的であることを、付け加えよう。弁護士は、中産階級のあるいはブルジョワジーのメンバーである、小サラリーマンは、中産階級に所属するあるいは所属していないことは言うことは、広く選択の問題であるし、いかなる科学的な真実の結果とし生じない。そんなに、社会の階層化は、人々が、階層化をきちんと並べるように

試みる、あらゆる分類よりもっと複雑な本質によって、単に、研究者の精神の中で存在することは、真実である。さて、それは、性格をその道具の価値を与えるし、性格を三〇年代のフランス社会の中で基礎的な役割を演じるように許す、中産階級を揺れ動かして、正に不正確な性格である。

・共通の価値。中産諸階級の『階級的意識』は、社会的集団の残りを浸透する、ある数の価値に根拠を置く。ブルジョワジーとプロレタリアートの間に、中間の諸集団に所属するように、意識。中産階級は、中産階級を資本主義社会の支配するグループに構成した、中産階級が、生産諸手段を所有しない、事実によって、ブルジョワジーと区別される。この要素は、中産階級をプロレタリアートに近づける、しかし中産階級は、この財産が、店、農場、事務所等になるように、財産の所有のお陰で、労働条件の不安定を免れる。もし中産階級のメンバーたちは、メンバーたちが、都市のあるいは農村の『庶民』から生じたことを承認するならば、メンバーたちは、彼らが、彼らの生まれの地位を変更した、社会的上昇の過程を着手したように考察した。中産階級の意識の構成する第二の要素は、社会のマルクス主義的ヴィジョンに反対して、この異質のグループのこの全体が、引き合いに出す、社会的哲学である。マルクスによれば、避けられない歴史的闘い（ブルジョワジーとプロレタリアート）の中でぶつかり合う、二つの基本的な勢力は、中間のグループを吸収するのに当てられる。逆に、中産階級のヴィジョンは、次の世代が、なお傷付いた社会的地位を改善するのに、労働、貯蓄及び努力のお陰で、前の世代の地位より上の地位に到達するため、現実の上昇が、段階毎に、多数のグループである、スムースな社会のヴィジョンである。恵まれぬ人々の生活水準の引き上げ策は、本当に中産諸階級の理想であるし、もし中産諸階級が、同様に平等に憧れるならば、そこを通って、機会の平等、すなわち、家柄と財産の特権の廃止を理解する必要がある。この地位向上は、確かに個人的努力の言い回しで思い付かれる、しかし、恵まれた手続き、学校は、存在する。免許状は、実際、各人に対して、成功への道を切り開く。両親の社会的状況がどうであろうと、共和制の義務が、最も才能のある人々に対して、彼らの素質を価値を高めるように手段を提供するのにある。財布の制度は、財産の不平等を収拾できるはずで

ある、そして続く政策は、『独特な学校』、すなわち、初等と中級の、二つの教育の手続きの統一を実現するよう努力する。制度の最高の作品は、二八年に、中級の教育の無償である。結局は、財布が、中産階級の現実の生活水準の引き上げ策を保証して、制度は、相対的に第三共和制の下に機能を果たす。社会的上昇の途中にある、このグループの存在は、三〇年代の初めのフランス社会の中で、より重要な心理的な役割を演じる。しかし、そしてそこで、それは、中産階級の第三の特徴である、中産階級は、弱い状況の中で存在するように意識している。中産階級の経済的地位は、中産階級を社会的格下げの蔽護の下に全然置かない。そのように、中産階級は、敵たちに対して、多くの努力の後に獲得された状況を再び掛かり合う気になり得る、すべての人々に切望している。最初のランクで、平等主義の社会主義は、従って、中産諸階級の最も恒久的な熱望に対して致命的な打撃をもたらして、昇進のすべての可能性を廃止した。しかし、その集中の軽い気持は、小土地所有者に対して、そして中産諸階級の大部分の地位を創設する、要素に対して、恐るべき脅威を構成する、資本主義。この集中の恐れは、本能の反資本主義、すなわち、『金持ちたち』に反対する『下層の人々』の自然の反抗によって、表現される。この二重の危険に直面して、中産諸階級は、国家に保護を要求するため、国家の方に向く。二つの危険の国家に従って、中産諸階級は、社会党員たちの親切なしの敵たち、すなわち、隠和な人たちに対して、あるいは、社会的原理が、中産諸階級の防衛の方に向けられる、そしてこの理由のため、同時に社会主義と資本主義に反対するように要求する、急進党員たちに対して、信用する。さて、中産諸階級の世論は、彼らの数的な役割が、本質的になるだけ一層多くフランスの政治的生活の中で、重い比重で重きをなす。

・中産諸階級の数的な重要性。ぼんやりした国境に対して、数多く、グループを評価することは、無茶な企ての所轄であるし、明白に恣意の役割を含む。たとえ手に入れられた結果が、大凡であるにしても、従って手に入れられた大きさの順番は、興味深い。人々は、三〇年のフランスの『ブルジョワたち』の一、四〇〇万の約一、二〇〇万は、都市の中産諸階級のメンバーであることを、考察できる。しかし、フランスの中産階級を特徴づけるため、控え目だった規準は、事実、

中産階級に大部分の農民たち、すなわち、フランスの農村世界の要点を形成する、中小自営農たち（すなわち、フランス人たちの八―九〇〇万）を付け加えるのに至らしめる。人々は、もし人々が、三一年の人口調査を参考するならば、確かに異質な、しかし社会の共通したある構想を持っている、これらの中間のグループは、国の労働力人口の約半分を代表することを、確認する。人々は、よくフランス社会のより重要な社会的グループの前面にいる。

労働者の世界　農民たちとブルジョワジーと比べれば、労働者の世界は、フランス社会の第三の重要な構成分子を構成する。肉体労働者たちの数は、三一年まで増加する。彼らは、当時労働力人口のたっぷりした三分の一を表す。もし手工業的な小企業の数が、減ったならば、これらの労働者たちの大多数派（三一年に五八、四％）は、一〇〇以下のサラリーマンたちの企業の中で使われる。三〇年代のフランスの労働者―型は、たとえ五〇〇以上のサラリーマンたちの事業所の中で働く、人々の百分率が、増大する（二六年に労働者たちの数の一八、九％から三一年に二一、八％まで）としても、小企業の労働者に留まる。直接の第一次大戦後の年月は、労働者の世界の構造の中で、本質的な変化を行われるように見えた。大戦前の二つの集団に対して、熟練労働者と相互交換可能な未熟練労働者は、数的増加が、極めて急速である、第三の集団を付け加わる。人々は、間もなく『非熟練労働者』と呼ぶ、『単純作業労働者』の集団。数日に『仕事場で』形成された、労働者の役割は、機械を供給するあるいは監視することにある。工作機械を装備された、最も近代的な工場、例えば自動車工場あるいは冶金工場の中で、これらの非熟練労働者は、事業所の職員の四〇％まで代表する。これらの改革は、深く労働者の世界の労働諸条件を変える。集団的に働く、労働者たちのグループによって実行された、複雑な『仕事』の古い考え方の、労働の生産性の概念は、代りになる。人々は、その機械の前に、ある数の同一の行動という値段で、労働の部分を完全に実現して、労働者の能率を評価する。大抵の場合、この操作は、連続工程に実行される。生産性は、確かに人目を引くやり方で、二一年から二九年まで、増加する、しかし、この利益の代価は、仕事の細分化、非熟練労働者の意気沮喪、奨励金あるいは罰金に伴った操作の時間測定である。この図式―Ch＝チャプリン、モダン＝タイム―は、単に、濃

厚な大工業の中で雇われた、労働者たちの少数派に関係がある。一九年に八時間労働日の採択以降、社会的立法は、もし人々が、社会保険について、二八―三〇年に、法の最近の採択を別にするならば、極く僅かの進歩をなされた。人々は、その立法が、社会的保護の領域の中で制定することは、重要な進歩を実現しない。それに反対して、労働者たちは、二〇年の大スト以降、労働組合が、もはや企業の中で市民権を持たない、事実から当然、もっと敏感である。経営者は、『主導者たち』を見破るように、そして規則の尊重を保証しながら及びすべての宣伝を禁止しながら、秩序を支配させるように、負担させられた監視のグループを組織しようと努力する。この『社会的空白』は、祖国と縁が切れた農民たちであるいは最近の日付の移民たちで構成された、非熟練労働者たちの世界の中で、共産主義の宣伝の成功が、社会党員たちとサンディカリストたちの活動の全体について疑いを投げると同様に、三〇年代の初めに、労働運動の後退で話させることはできる。

労働者の生活様式　全体として、労働者の条件の進歩は、第一次大戦の終わり以降、展開された、年月の間に弱かった。一九―二二年に強い値上りの後、労働者の実質賃金は、三〇年までもっとゆっくりと増加するし、結局のところ、実質賃金は、二〇年代の間に、一七％で評価された現実の増加を知っている。疑いもなく、人々は、その増加が、利益の増加より、更には官公吏たちの購買力の増加より下であることを、注意できる。それでも、労働者の購買力のこの増加は、生活諸条件の中で明白な進歩によって表現されることである。なお、この領域に、色々な産業部門を区別することは、相応しい。二〇年代の中で、改良は、食料品に関して現実である。肉、果物と乳製品は、労働者のメニュの中でより少なく稀であるし、パンと乾いた野菜の消費は、減らす。それに反対して、住宅の問題は、不安のままである。産業の集中は、安く住居の画一的な煉火の建物が、財政的手段なしで日曜大工によって財産の機器で建築された一戸建て住宅が、増大する、工場の、漠然とした土地の、倉庫の灰色の彼らの風景で、労働者の郊外（特にパリの北部で及び北東部で）の発展を伴った。それは、設備の不足状態の中で、首都の周りに建てられる、『赤色ベルト地帯』の風景を構成する、工場の煙の暗い空の

下に、この陰気な環境である。ここで、激しい階級的意識は、生まれる。共産党は、それに党の最も忠実な集団を見付ける。労働者の住宅は、老朽化した、非衛生的な及び人口過剰である。戦争の破壊、家賃の凍結は、この遅れを説明する。相次ぐ政府の住宅政策の欠如と同様に。安く住居の建築の民間会社に対して減税を与える、一八九四年法以来、いかなる法は、社会的住宅を優遇しない。建築に対して重要な貸付け金が、与えられるため、二八年に、ルシュール法を期待する必要がある、しかし、その法は、フランスが、三〇年代の初めに恐慌によって打撃を与えられる時に、現実の効果で産むように時間を持っていなかった。この時期に対して、パリの住宅の四分の一は、多くの一〇〇年を持っている。不動産の大部分は、踊り場について、単に、水と便所を所有する。工業の大都市は、労働者たちが、鮨詰めになる、あらゆる大都市の非衛生的な小島を持っている。三〇年代の初めに、労働者の条件は、世紀の初めの状況のその大きな路線の中で決して異ならない。または、少なくとも、改良は、殆んど知覚できない、遅れている。それは、すべての社会法が、フランスの経済的な組織を構成する、大多数の小企業の生存を活用することである。すべての社会保険料の企業負担分の増加は、従って、耐え難い脅威のように思われる。もし一九年に獲得された、八時間労働日と週の休憩が、明白な進歩で表すならば、彼らは、増加した神経質的な摩耗を引き起こす、労働の新しい技術に結び付けられた休憩の必要を単に満足する。就労週日の制限、年の休暇の授与は、この労働者の世界のため、第二のレヴェルの要求ではない。いずれにせよ、日常の生活の改良の意思を除けば、労働者の世界は、彼の熱望の中で分かれているままであるのは、事実である。深遠な階級的意識を獲得した、集中された大工業の労働者たちにとって、解決法は、ブルジョワ的秩序を非難する、及び平等が、支配する、新しい社会を生じさせる、革命によって、共同の解放の中でその基礎を置く。労働者たちは、社会主義の原理の約束に対して敏感になる、そして三〇年代の初めに、共産党の中で、変化の最も有効な媒介物を理解する。『赤色ベルト地帯』は、共産党の代議士たちを選ぶし、サン＝ドゥニの例で、共産党の市長たちは、そこで社会党の市長たちを取って替わる傾向がある。しかし、その地理的な集中が、その重要性の感情を増加するにも拘らず、このプロレタリア化された労働者

の世界は、三〇年代の初めに少数派のままである。小企業の労働者たちに対して、鉄道あるいは実践的に官公吏化された、兵器廠の地位での労働者たちに対して、社会的熱望は、全く異なっている。革命の問題ではないし、社会的向上の問題である。探し求められた理想は、子供たちに対して、中産階級に、及び多分、一つあるいは二つの世代の中で、ブルジョワジーに辿り着くように認める、個人的な恵まれぬ人々の生活水準の引き上げ策である。子供たちの精神の持主の中で、この促進の基礎的道具は、学校に留まる。ブルジョワジーにとって同様に労働者の世界にとって、文化的態度の所轄である、世界の代表制の基本要素は、基礎的なやり方で振舞いを決定する。

文化の多様性　その伝統的な定義の中で、文化は、教育の高い水準で恩恵を浴する、及び押された美的な調査を証明する、文学の、絵画の、音楽の全作品を理解できる状態にある、薄いエリートの特性である。しかし、この狭い受諾に対して、今日、初めの作品を含まれながら、社会を特徴づける、振舞いと実践の全体を指示する、別の作品は、その代りになる傾向がある。この意味で、実は、人々は、エリートの文化で共通点が、文化は、引き合いに出す、グループに対して参照に仕えることである、民衆の文化のあるいは労働者の文化で話すことはできる。

エリートの文化　文化は、最初に、教育の高尚な手順に対して、接近を経験する。欠くべからざるバカロレアに導く、中等教育、次いで高等教育。そのようなものは、知的世界に対してあるいは指導諸階級の世界に対して、統合を許す、道である。三〇年代の初めに、このエリートの文化は、混乱と苦しみによってマークされる。算数と物理学の進歩、精神分析の研究は、実証主義者たちの価値を安心させる、古い体系を終わらせた。夢想、無意識は、彼らの優位性を確認する。紛争は、第一次大戦前に生まれた、この文化的混乱を強化したし、ヒューマニズムの美徳の中で古い信念を着手した。超現実主義的運動（アラゴン等）、絵画、映画は、合理主義に反して知的エリートの部分のこの反応を表す。現実の新しい形態、すなわち、夢想の開発から、自動的な書体から、無意識の探険から生まれた形態を見付けることが、問題である。理由の国境の有効性を承認するような同じ拒否、三〇年代のパリの中で人気をさらう、精神分析の同じ影響。協約、タブー

と国境のこの拒否は、芸術の世界と思想の世界に関係があり、新しい文学の、絵画の及び音楽の構想を生む、実りのある美的な調査への、しかし新しい政治的思想の矛盾した開花への道を開く。逃避の反射的動作を表す、調査、失望させる現実の外に逃げるような意思。結果として、一連の新しい文化的な実践は、日の目を見る。この社会は、気晴らしで渇望する。社会は、『夢中になった年代』の音楽、ジャズのリズムに陶酔する。社会は、テラス等に住む。社会は、変革への真の崇拝を誓う（R＝クレール等）。

民衆的文化　・『大衆的文化』の始まり。もし、中等教育の手続きに辿り着く、人々と、基礎教育とその延期で満足して、結局、高等教育の道を閉じられた、人々の集団の間に、真の障害物が、存在するならば、障壁は、同様に防水ではない。最も目立つ事実は、多分、民間伝承の及び農村の文明の伝統的文化の、中産諸階級の及び労働者階級の一部分のレヴェルで、エリートたちにあっては確認された欲望と同じ逃避の欲望を表す、『大衆的文化』の場所を、生じさせる。しばしば、軽蔑するやり方で、『下位文化』に資格を与えられた、社会は、それでも、社会が、生活費と現実の熱望を表す、問題に考慮に入れられる。社会は、直接の物質的幸福の追求に答える。そのように、それらのデモの間に、警察の小説の流行、『大衆誌』等。なお、民衆界の中で、カフェ＝演芸あるいはミュジックホールの成功と、三〇年の周りにレコード産業の膨張及びラジオの普及を注目する必要がある。映画は、この大衆的文化から発する。『スター＝中心主義』は、ミュジックホールと映画で、生まれる。

・**スポーツ、民衆的興行**。要するに、ブルジョワ界の特性であった、スポーツは、三〇年代の中で大衆的文化の欠くべからざる部分になる。スポーツは、民衆的興行に変化する。群集は、ボクシングあるいはフットボールの試合の結果に夢中になる、競技に出席するため、スタディアムを侵入する、自転車競走の選手たちの功績に感動する、そしてフランスの一周自転車競走の中で、近代的巨人の試合を見る。実は、盲目的愛国主義を進む、現象と、一八九六年に回復されたオリンピック＝ゲームの増大する政治化が、証明するように、軍隊好きの反射的動作。世論は、代表された住民たちのそれぞ

れの素質を測る、競技をそこで見る傾向がある。もしスポーツの試合への出席が、衰退に宗教的信仰に対して代理を仕える、大衆的共感の現象のように思われるならば、この最後の出席は、もはや共同の信仰の中でいかなる役割を演じないということを、信じるように間違っている。逆に、フランス人たちの多数派は、なお非常に生き生きとした信仰を引き合いに出す。

宗教的信仰の敏捷さ　三〇年代のフランス人たちにとって、カトリック教の教会と共和制の間に、大きな闘争の時代は、今後満了した。ピウス一一世等の教皇在位期間の中に、たとえ教会が、修道会を創設するように可能性を限定する、〇一年と〇四年の法の見直しを望むにしても、教会は、共和制を再び問題視するよう欲しない。しかし、和解策は、教会と国家の間に確立させる。最初の教会は、暗黙の中に宗教から独立した国家の原則を受け入れるし、制度の敵たちに対して、位階制度と忠実な信者たちを結合する、諸関係を断ち切るように努力する。この領域の中で、本質的な日付は、司教団の、聖職者の及び忠実な信者たちの多数のメンバーたちにあっては、深遠な意識の危機を引き起こす、しかし真の政治的拘束から教会を解放する、ヴァチカンをアクシオン＝フランセーズを非難するように見える、二六年の日付である。第一次大戦の間に及び国民ブロックの多数派に対するカトリック教徒たちの参加にとって、カトリック教徒たちが、示した、愛国主義に付け加えられた、この事実は、三〇年代の初めに、決定的に、共和制に対してカトリック教を統合した。国家は、闘う反聖職者至上主義を断念した。二四―二五年に連合の政府によって乗り出した、二一年に回復された、ヴァチカンへのフランスの大使を廃止するように、次いでアルザスとモゼールの取り戻された諸県に対して、政教分離の法を広げるように、企ては、カトリック教徒たちの動員と左翼の世論の無関心の前に失敗した。今後、諸政府は、第三共和制の初めの宗教から独立した立法を維持するように満足する。この和らげる雰囲気の中で、宗教的生活の目覚めは、発効する。すべての政治的行動から解放された、教会は、果断に社会的行動の方に向く。労働者の世界の非キリスト教化によって心配された、ピウス一一世の影響の下に、教会は、聖職によって社会を回復しようと試みるであろう。そして、青少年に対して、

実は、この回復の心遣いは、託される。二七年に、キリスト教労働者青年同盟、二九年に、キリスト教学生青年同盟とキリスト教農業青年同盟は、創設される。社会的平日紙は、教会の社会的原理を普及するような任務として、固定される。イエズス会修道士たちは、社会問題研究所、民衆行動所を創設するのに。三〇年代のフランスは、従って、フランス社会の中で、教会の場所の基本的な変化の初めを見る。その新しい世代は、もはや自分が権力の補助であることを願わないし、世代を教義に関する伝言を解放しながら、社会の中で没入させたことを願う。忠実な信者たちと牧師の大多数派は、もっと伝統的な態度にキャンプをすることは、真実である。いずれにせよ、カトリック教徒たちの非常に異なった二つの世代の存在で、信仰への参照は、三〇年代のフランスの基本的価値の一つのままであるし、たとえ非キリスト教化が、進行するにしても、フランス人たちの文化を深く浸透させることは、事実である。

おずおずと産業と大衆的生産の近代的な世界の中で入る、しかし心性の中で同様に構造の中で、農村の、職人の過去の支配的な特徴を保持する、なお最初の世界的な紛争から回復しなかった、これらのフランス人たちについて、実は、経済的な面が、当時のフランスをマークする、不適応の全体の啓示者の役割を演じる、三〇年代の危機は、溶けるであろう。(二)

二　三〇年から三五年までフランスに経済的及び社会的危機

経済的不景気の見地によって、実は、フランス人たちは、少なくとも三一年九月（強調、ポンドの切り下げは、その切っ掛けとなる）の彼らの国を襲う、恐慌を意識する。当時まで、フランス人たちは、二九年に合衆国に始まった、次いで世界の全体に達した、恐慌が、全国的な経済的活動の均衡の及びアメリカ風の巨大化に対して彼らの不信の理由で、彼らを損害を免れさせたことを、考えることはできた。三一年の後、フランスの恐慌は、世界の恐慌の性格に比べて独創的な面を

帯びる。先ず最初に、恐慌の勃発の遅ればせの性格の理由で、しかし全く特殊な様式の理由で。ここで、次から次へと続いてこれらの破産のない、失業の、最も極端な政治的な解決法を受け入れるのに至らしめる、深遠な悲惨の発展の爆発的な拡大のない、しかし、ゆっくりと活動を麻痺させる、衰退の恐慌。それに反対して、三五年から、工業国の大部分が、彼らの恐慌の逃げ道を開始するのに、フランスは、戦争に不意に現れる前に、三九年まで延びる、経済的不調の新しい接近をよく知っている。三〇年代のフランスは、従って、最も人目を引く面が、三一年と三五年の間に位置づけられる、永続的な危機の雰囲気の中で生活をする。

フランスに経済恐慌の独創的な性格、遅ればせの、しかし有害な恐慌

遅ればせの恐慌　二九年に恐慌が、合衆国を突然襲うのに、フランスは、損害を免れされたように思われる。そして、同時に、フランス人たちは、彼らの国が、重複した繁栄を知っている、感情がある。貨幣のレヴェルについて、ポワンカレ＝フラン（二六―二八年）の安定化は、フランス銀行に対して、金及び外貨の殺到を引き起こす。準備金は、二七年に一八〇億フランから二八年に六四〇億フラン、二九年に六七〇億フラン、三〇年に八〇〇億フランまで移って、増加し続ける。動きは、貨幣の保証金に対して、この年、七七％に達するのに可能にして、三二年まで、続けられる。生産の領域の中で、二九年は、あらゆる領域の中でレコードの年である。

二九年に、貿易均衡の赤字が、目に見えない輸出によって埋められて、輸入は、五八〇億フランの価値に達し、輸出は、五〇〇億フランの価値に達する（外国に置かれた資産の収入、ドイツの償い及び観光の再開）。失業が、合衆国、次いで、漸進的に、別の大工業諸国に達するのに、フランスは、完全雇用の状況を承認する。三〇年に、人々は、単に、一、七〇〇の救助された失業者たちを記録する。三〇年の間、二、四五〇億フランに達する、なお全国的収入のためのレコード。要するに、二八年以来超過する、予算は、三〇―三一年の会計年度に対して、五〇億以上のフランの黒字残を用意する。内閣

総理大臣A＝タルディユーは、フランス人たちに対して、『繁栄の政策』を約束できる。フランス人たちが、状況を分析する時、彼らは、彼らの国が、『危機の中に世界の中で繁栄の小島』であるように、確認する。楽天主義は、実は、基礎である。世界恐慌は、大資本主義の恐慌として知覚されて、フランス人たちは、彼らが、アメリカ風に巨大化の幻影を逃れる、全国的活動の間にある均衡を保持する、人間的な尺度に対して中小企業への忠実に留まることはできたように、考察する。経済的な繁栄の維持は、彼らの賢明さの報酬である。疑いもなく、幾つかの経済の専門家たちは、未来の困難の予告する徴候を心配する、しかし、彼らは、少数であり、聴衆を欠く。そのように、彼らは、二六年以降、卸値の指数が、年毎に約三％のリズムに下がるし、この低下への傾向が、フランスが、この点について、世界的情勢を従って、規則的なやり方で続けられるように、確認する。同じやり方で、もし支払の均衡が、過剰のままであるならば、その収支バランスは、年毎に下がる、実際、貿易均衡の収支バランスは、消極的になり、二九年と世界恐慌の勃発から、支払の均衡の利益をもたらす二つの主な地位、ドイツの償い及び観光の収入は、傷付けられる。要するに、生産それ自体は、困難の徴候を与える。弱い収益性の理由として恒常的な諸問題及び開拓地の大部分の技術的遅れで知っている、農業生産は、フランスの貨幣の価値の低下によって、二〇年代の間に保護された。しかし、二六年にポワンカレによってフランの安定化で、為替相場の利点は、消滅するし、農業の諸製品は、それらの競争力を失う。これらの予告する徴候は、一般的に世論によれば知覚されない。先ず初めに、技術的諸理由のため。フランス人たちが、経済的現実を経験する、指数の不足と弱い認識。最後に、心理的諸理由のため。世論は、実際、国の経済的健康状態が、国の貨幣の準備金の総額によって推し測られるように、考察する。さて、この点について、状況は、良い。単に、世界恐慌の重大化で、実は、フランスは、その順番に、経済的不景気によって打撃を与えられる。フランスは、その隣国よりもっと遅く傷付けられる。三〇年の終わりで、農工業生産は、後退し始める。

農業生産の恐慌　農業恐慌は、フランスの農業の諸構造自体に切望している、ある数の諸問題を明らかにする。細分化

の問題は、原資料に位置づけられる。フランスの開拓地の七三％は、特に南西部と中央部の中で、一〇ヘクタール以下である。資産を欠いて、同様な弱い表面について金が掛かる投資を償還するように希望できないで、開拓地は、産業設備を整え得ない。全国的な領土の全体について無視できない、近代化は、単に、制限された地理的スペースを占めるし、単に、大中の開拓地と関係があった。従って、収穫高は、弱い。小麦は、平均して、イギリスに二三キンタル、ベルギーに二七キンタル、オランダに三〇キンタルに反して、一ヘクタールで一八キンタルを産出した。値段の問題は、この二重のハンディキャップの結果として生じる。三〇年に、フランスの農業製品の物価は、世界の相場に比べて余りにも高い。輸出は、困難である。唯一の関税障壁は、従って、外国の競争に反対して、国内市場を保護できる。農業製品の物価が、増加し続ける、開拓地の費用を覆うため、十分な余裕を実現するように認めないで、農民たちは、利益から開放するのに苦労する。同様に、農業の不安は、目に見えないし、農民たちの収入の月並みは、工業の製品の弱い消費者たちを作り上げる。彼らの困難は、従って、全国的市場の収縮に貢献する。疑いもなく、これらの構造的な困難は、新しくない。しかし、困難は、第一次大戦の間に食料品の需要によって、次いでフランの下落によってマークされた。ポワンカレの安定化は、二九年の不景気に帰すべき世界の不振が、なお強調する、フランスの農業の危機を明らかにする。この農業恐慌は、フランスの生産の基礎を構成する、そして最大多数の開拓地に関係する、三つの鍵の製品の売行き不振によって現れる。小麦、ぶどう酒及びビート。小麦の危機は、第一次大戦の間に新しい国々の生産の重大な増加に帰すべく、世界的レヴェルで、古い現象である。第一次大戦後、ヨーロッパの国々が、彼らの正常な生産を見出す時、それは、過剰生産である。三一年に、ソ同盟が、第一次五か年計画の融資を保証するため、小麦を再輸出し始める時、過剰生産は、その最高点に達する。フランスに、麦の種を蒔かれた表面積は、数を減った、しかし、収穫高は、二〇年代の間に敏感な増加を知っていた。九、〇〇〇万のキンタルの生産で、フランスは、小麦の四番目の世界的生産者である、そして国内市場は、その生産の全体を吸収できない。輸出は、従って、不可避性である。しかし、二六年以降、不可避性は、容易ではなかった。フランスの物価は、

外国に対して売上をブレーキを掛ける、値上がりを知っている。世界恐慌と小麦の市場の不振は、これらの困難を激しくする。小麦の生産者たちの状況は、劇的になる。ぶどう栽培者たちは、最良の状況にはいない。三重の構造的問題は、彼らの収入に重きをなす。フランスのぶどう酒の原価は、非常に高い。高い収穫高に対して、ぶどうの苗によって根あぶら虫によるぶどうの病害によって、一九世紀の終わりに破壊されたぶどう園の取り替えの理由で、生産は、過剰になる。要するに、フランスは、フランスが、唯一のはけ口である、そして売りさばくのに量を増加する、アルジェリアのぶどう酒の生産のほぼ全体を吸収する。小麦の市場にとって同様に、大部分の困難は、その資産が、彼らの用具と彼らの設備を近代化する、及び利益になる諸条件の中で生じるため、不十分である、小生産者たちの余りに高い数の存在から生じる。その結果、ぶどう酒の市場は、狭く気候的諸条件に依存する。二四年から三四年まで、一連の並以下の収穫は、相場を維持しようと可能にする。しかし、三四年と三五年の収穫の重要性は、物価の崩壊を引き起こす。三四年に、生産は、七、八〇〇万ヘクトリットルに達する、そして三五年に、生産は、なおアルジェリアのぶどう酒の七、六〇〇万ヘクトリットルである。ビートの状況は、相対的に劇的ではない。その理由は、その生産は、圧力諸集団が、公権力の政策に重きをなす、大生産者たちの事実である。それにも拘らず、もし砂糖の消費が、一三年以降、フランスに広く増加したならば、生産は、フランスが、外国からあるいは蔗糖の諸植民地から輸入すると同様に、飴類を吸収できる、問題より大きい。鍵たる製品の物価の下落によって現れる、フランスの農業のこの危機は、従って、世界的市場の諸条件に対して、フランスの農業の不適応の啓示者として振舞う。多くの点で、確認は、工業の領域の中で同一である。

工業生産の恐慌　工業恐慌は、厳しい、しかし、その恐慌は、選択式である。最も被害を受けた産業部門は、設備と機器の老朽及び生産性の月並みによって特徴づけられた、最も古い産業部門である。そのように、採掘産業、冶金産業及び繊維産業は、同様にフランスの経済の鍵たる産業部門である。輸入が、同じ日付の間に三、六〇〇万トンから二、三〇〇万トンまで移って、三〇年に五、五〇〇万トンから、石炭の生産は、三八年に四、七〇〇万トンまで下がる。石炭労働者

たちの数が、減少するのに、鉄鉱石の生産（五、一〇〇万トンから三、三〇〇万トンまで）のためにもっとマークされた後退。その生産とその労働者たちの数を二倍にして、連合王国と同じなら、第三の世界のランクに到達して、三〇年まで急速な進歩を行った、冶金産業は、急激な厳しい一撃をよく知っている。高炉の数は、二八年に一一五から三六年に八四まで移る。三七年に一〇四まで再上昇の後、その数は、三八年に八六までまた落ちる。この日付で、フランスは、その一〇〇万トンが、全国的生産を吸収するのに、加工産業の無能のために自然のままに輸出させる、もはや鋼鉄の六〇〇万トンの外には供給しない。しかし、最も古い、繊維産業の部門の中で、実は、恐慌は、最も厳しい。ノール県の古い羊毛のセンターは、第一次大戦によって、引き起こされた破壊から決して回復しなかった。恐慌で、羊毛織物の輸出は、崩壊する、次いで、自然のままの羊毛の輸入、その結果、三八年の織物の生産は、二八年の生産の半分の外にはもはや表さない。綿布に関して、恐慌は、諸植民地の中で、はけ口の存在によって緩和される。フランスは、世界の三番のランクから四番のランクまで移る。要するに、絹布産業は、恐慌の結果が、結局、レーヨンの競争によって拡大されて、真の崩壊（二七年に三、六〇〇トンから三八年に六〇〇トンまで）を知っている。結局のところ、工業生産の全体の指数は、産業部門に従って敏感な相違で、二九年に一二一の指数（三八年に一〇〇のベース）から三五年に九四の指数まで移る。

もし古い伝統的な産業が、恐慌によって正面で襲われるならば、近代的な産業部門は、よりよく不景気に抵抗する。ある産業部門は、部門の進行を続けるのに成功する。そのように、フランスの沿岸の水力発電の設備が、続けられるのに、その生産が、三〇年と三八年の間に一六〇億キロワットから二〇〇億キロワットまで移る、電気は、同様である。三二年から三五年まで、パリーオルレアン鉄道の電化のためにフランスのセンターのダムは、完成される。八つのダムの計画でアルザスの運河の建設は、企てられる、等。二九年まで立派な発展を知っていた。自動車産業は、確かに三〇年から三二年まで衰退を蒙る、しかしこの日付後に、漸進的に失われた場を取り戻す。それに反対して、進歩は、アルミニウムの中で現実である。二九年に生産された二万九、〇〇〇トン、三八年に四万二、〇〇〇トン。ドイツの免許の利用のお陰で、

二〇年代の中で急激な増大を作った、そして恐慌にも拘らず、染料、薬品、ソーダ及び肥料の領域の中で、その弾みが就いて続いた、化学について同じ確認。二八年に、恐慌の前夜に、この産業部門は、ローヌ工場とプランク工場の合併で、人目を引く産業の集中を知ったことは、真実である。この産業の集中は、経済的困難を克服するため、最良の状況にあった。最も人目を引く進歩は、トルコ帝国の石油のドイツの役割のフランスへの授与によって、第一次大戦後、刺激された、フランスの産業の最も若い、石油産業の進歩である。フランスは、イラク石油会社の企業連合の設立に二三、七五％のため参加する、フランス石油会社を設立した。フランスは、外貨の不足が、合衆国あるいは中東以降、洗練された製品よりむしろ原油を輸入するに到らしめる時に、原油から自由にする。フランス石油会社は、当時フランスに配分の組織網の配置を執行する。三〇年代の初めに、それは、フランスに最初の精油所を設置した、外国諸会社である（具体例）。三八年に、フランスの精錬の容量は、八〇〇万トン（三一年に一〇〇万トンに反して）である。農業の中で同様に、工業の中で、恐慌は、従って、選択式である。恐慌は、最も老朽化した企業の世界的市場への不適応を明らかにする。この意味で、フランスの恐慌は、『業績不振の企業』を除外する、伝統的な周期的な恐慌によりもっと少なく、最も発展された資本主義的企業と正面と関係がある、世界恐慌に似ている。

投資と公の財政について恐慌の結果　・経済恐慌の最初の結果の一つは、投資の凍結である。企業の利益が、減少して、主な自己金融の根源は、消滅する。さて、財布に値を付けられた、フランスの会社は、将来に対して疑い深い財政市場について、入手したばかりの金で手に入れるのに決して到達しない。廃用の機器の更新の欠如は、近代化をブレーキを掛けるし、単に、最大部分の企業の遅れを重大化させる。古びた、生産の装置は、恐慌に立ち向かうため、必要な財源を見付けることはできない。この現象は、不振の国を外出するのに当てられる、あらゆる公の政策を非難する。

・予算の赤字。公の財政は、経済的活動の麻痺の余波を蒙る。ある年月以降黒字の、フランスの予算は、再び三一年からである。この状況の原因は、最初に、財政的徴収の減少を切望している。恐慌は、直接税の収益を制限する。その上、

対内的と対外的物価の低下と輸出の下落は、間接税の成果と関税の成果を着手する。さて、同じ時期で、支出は、一方では、三三年から、ドイツの再軍備に答えるため、採択された軍事的及び船の予算、そして他方では、A＝タルディユーによって採択された、『アメリカ風の政策』の結果のために、増加する。二九−三〇年に、会議の主宰へのポワンカレの後継者は、実際、厳しい経済の政策と縁を切る。減退の最初の徴候が、現れるのに、経済を推進するのに当てられる、反周期的な政策が、問題である、そして、タルディユーを彼の同時代人たちの考えより進んで経済的考えの功績と認める必要があるのか。これ程、不確実なものはない。選挙目当ての政策の振舞いで、合衆国のために熱中で及び経済的仕組の自制で考慮することは、困難である。いずれにしても、タルディユーの金の掛かる措置（道路の建設と田舎の電化、免税、農業災害の犠牲者たちの賠償、官公吏たちの給与の、恩給の、俸給の増額、在郷軍人たちへの退職金の割当）は、国家の予算に重きをなす。三〇−三一年会計年度は、五〇億フランの赤字を明らかにする。会計年度は、三二年までこれらの制限の中で留まる、しかし三三年に一一〇億フラン、三四年に八八億フラン、三五年に一〇五億フランに達する。

・支払の均衡の不均衡。要するに、恐慌は、支払の均衡の弱い均衡を再疑問視する。貿易の均衡は、恐慌の前に赤字になる。この最後の均衡は、輸入の総量を制限するため（三一年に一三〇億フランから、赤字は、三五年に六〇億フランまで移る）、政府によってなされた努力のために、赤字を決して悪化させない。三五年に、輸出は、なお輸入の七五％を覆う、しかし、恐慌に帰すべき貿易の短縮は、この日付で対外貿易の全体的な総量が、二九年に三分の一の外にはもはや存在しないようである。その代りに、支払の均衡のある別の部署は、恐慌によって正面で関係させる。観光の収入は、崩壊する（三一年に六〇億フラン、三五年に七億五、〇〇〇万フラン）し、三一年に、一六億フランを手に入れさせた、ドイツの償いは、フーヴァー＝モラトリアムによってこの同じ年を中断されているし、結局三二年にローザンヌ会議で廃止されている。要するに、もし人々が、外国に置かれた資産の収入の紛争を付け加えるならば、三一年から、支払の均衡は、赤字になる。三一年から三五年まで、併せ持った赤字は、金で決算する必要がある、一四〇億ポワンカレ−フランである。さて、三三年以

降、黄金は、フランス銀行に大勢集まるように止める。三五年から、資金の逃亡は、貨幣を脅かす。危険は、恐慌の重大さの世論に対して自覚させる。フランスの恐慌の基本的特徴が、引き出されて、その原因について心に聞く、そしてその特殊性を説明することは、相応しい。

フランスの恐慌の原因

ユニークな年表の理由　恐慌によって襲われた最初の大工業諸国（合衆国、連合王国、ドイツ）の中で、それは、最も脅かされた、動態の資本主義に所属する、産業部門である。産業部門を、増大する生産の購入に対して、必要な支払の手段は、不足していた。以上のことから、過少消費の現象によって恐慌の説明がある。企業の貸付け金に対して、大きなアピールは、ドイツに同様に、貸付け金が、証券取引の投機を金を入れる、合衆国に対して、経済的生活を貸付け金に基礎を置かせる。同様に、証券取引の恐慌によって、実は、合衆国に対して、不景気は、始まる、そして不景気は、最も動態的なヨーロッパの産業部門の中で投資されたアメリカの資産の回収の及びアメリカの輸出の停止の二重の現象によって、世界の残りに広がる。恐慌は、本当に最も動態の資本主義の恐慌である。フランスの恐慌の様相は、少し異なっている。その理由は、フランスは、二八年から、フランの公式の安定化の結果を蒙るし、世界的市場についてその再評価によって迷惑を掛けられる、輸出の方に向けられた近代的企業の制限されたグループに対して除けば、二義的な状況の中で見出される。一般的やり方で、彼の貧弱な力学によって及び彼の投資の貧弱さによってマークされた、関税障壁の後ろに蔽護されて、フランスの経済は、少しも外国の資産を引き付けるのに性質のものではない。その結果、フランスの経済は、アメリカの資産の回収の結果によって大きく容赦される。それらの銀行、大多数の企業は、恐慌の伝播のモーターであった、この措置によって打撃を与えられない。同一のやり方で、フランスは、アメリカの恐慌の及び外国に対してアメリカの購買の制限の結果として生じる、世界的市場の短縮によって、単に、弱く関係される。外国に働くのに及び世界的市場に売るのに慣れされた、単なる輸出の諸企業は、打撃を与えられるし、それらの企業は、単に、少数を代表する。そのように、普通

の消費の企業を後を追って、良質の（二八年から関係された）伝統的な企業は、三〇年頃に恐慌を蒙り始める。逆に、専ら国内市場について行う、小企業の総体は、相対的に保存されたままである。恐慌は、三〇年秋頃に、しかしゆっくりと、フランス人たちの多数派が、それに自覚しないで、及びその直接の結果を蒙らないで、後にフランスを襲う。要するに、もし銀行の貸付け金の世界的制限が、三〇年からフランスに実は反響であるならば、その制限は、単に、金融市場に訴える、企業に打撃を与える。大部分のフランスの企業の家族的構造は、それらの企業を保護する。借金をさせないで、それらの企業は、払い戻しの諸問題に直面させない、それらの企業は、従って、どうにか存続する、ペースダウンして回る、解雇しないで労働時間の数を減ずることはできる。フランスの恐慌の遅ればせの性格は、従って、二つの理由を説明される。第一の理由は、恐慌それ自体の認識の諸問題に切望している。三四―三五年まで、貨幣の立派な維持は、世論の眼に対して、生産の下落の結果を包み隠す、そして三一年から、恐慌を知られる、多数の徴候は、単に、ゆっくりと分析される。フランスは、その経済的諸構造の古風な性格によって、世界的不景気の結果を保護される。世界的市場の周辺に、フランスは、アメリカの恐慌の最初の渦を蔽護している。それは、ある意味で、当時のフランス人たちの哲学を確認する。それは、フランスに対して、ウォール＝ストリートの暗い木曜日によって、開いた大きな近代的資本主義の危機の直接的な反撃を回避するよう許した、確実に小企業の崇拝である。従って、どのように、古風によってこの保護が、もっと長い間に演じなかった、そしてフランスが、その順番に、三〇年に同様に、不振によって襲われたことを、説明するのか。

なぜフランスの恐慌か　・英ポンドの平価切り下げの結果。フランスの恐慌の勃発の年表は、かなりはっきりしたやり方で、どんなその基本的モーターであるのか、指示する。三一年九月末から、実は、はっきりしたやり方で、工業生産の指数の垂直の下落は、始まる。大多数の別の国々（スカンディナヴィア、フィンランド、コモンウェルス国、ポルトガル、オーストリア、日本）の貨幣の、及び別の国々（トルコ、イラン、ラテンアメリカ）の中で為替管理によって隠された貨幣の調整の平価切り下げを引き起こす、三一年九月二〇日の英ポンドの平価切り下げと同時性は、特に驚くべきものである。事実、

三〇年まで、フランスの製品に対して、為替相場の利益を残すように計算された、二八年のポワンカレ＝フランの安定化は、フランスの物価に対して、工業部門の大部分の中で、しかし農業と豪華な製品の中でではなく、世界的市場の相場より下の約二〇％であるように認めた。三〇年から、原材料、農業の食料品と製造された製品の世界的相場の一般的低下を引き起こして、不景気の結果は、漸進的に、これらの製品が、享受する、そして普通の消費の財産の生産的産業が、苦境に立たせる、為替相場の利益を噛り取る。人々は、三一年八月に、フランスの物価が、世界的相場と平価であることを、考察できる。この時期で、英ポンドの平価切り下げ、次いでその恒常的な価値の低下とあらゆる貨幣の価値の低下は、フランスの物価と世界的物価の間に均衡を壊す。この最後の日付（三五年）で、二八年の状況は、結局、全体的にフランスを犠牲にして、逆にされた。フランスの物価は、今後、世界的物価に平均して二一％より上である、そして農業の中で、ずれは、はるかにもっと重大である。三二年に、小麦の一キンタルは、フランスに二二金フラン、シカゴで一一金フランの値段である。人々は、フランスに経済恐慌の拡大の基本的理由にここで取り組む。この物価の不均等の結果は、間もなく感じさせない。フランスの輸出は、三一―三二年から下がるし、三四―三五年に崩壊する。支払の均衡の強い悪化を避けるため、政府は、輸入を制限するよう決定する。人々は、貿易の一般的な不一致を及びフランスの経済の相対的な麻痺状態を目撃する。外国の製品は、フランスに、保護貿易主義の障壁の強化と許可の及び割当（三七年に、フランスの輸入の五八％を額に入れる）の体系の配置にも拘らず、浸透する。外国の製品は、全国的土地について、フランスの商品に対して勝利を得た競争を行う。状況は、三三年から重大化する。実際、三二年春と三三年の初めの間に、人々が、フランスの経済についてその反響を及ぼす、世界のレヴェルで、軽い経済的回復を確認するのに、新しい打撃は、フランスに到らしめられる。三三年四月のドルの平価切り下げは、なおフランスの物価対世界の物価という不均等を強調する（ドルは、三三年四月に二五、五〇フランから一か月後に一八、二五フランまで移る）。取引は、フランスの物価の二五％から三〇％まで、再評価に戻る。外国の物価が、危機と平価切り下げの二重の結果の下に低下したのに、その関税障壁によって保護された、フ

ランスは、単に、世界的不振のうんざりさせる反響を見分けるし、フランスは、すべて犠牲を払って、その貨幣の価値を保存することに切望している。フランスは、貨幣の間に安定した平価を保護するため、ベルギー、スイス及びオランダと一緒に、三三年に、『金ブロック』を構成する。しかし、三五年三月から、ベルギーは、金ブロックの崩壊を知らせて、平価を切り下げる。

・なぜフランスの恐慌は延びるのか。フランスは、三五年から、世界の全体の中で現れ始める、この軽い再開の動きを知らない。逆に、恐慌は、三五年の終わりで、三二年のレヴェルに対して、物価の及び生産のレヴェルを立ち戻らせて、重大化する。従って、三六年に弱い再開にも拘らず、恐慌は、三七―三八年まで延びる。どのように、フランスの恐慌の持続時間は、説明するのか。人々は、二つの説明のレヴェルを区別できる。一つの説明は、政府の政策に切望している、別の説明は、フランスの経済的諸構造に切望している。最初の交替で、すべて犠牲を払って、フランの価値を維持するように望むのに、相次ぐ政府のこの激しい敵意がある。措置は、フランスの製品に対して、それらの競争力を見出すように禁じた。フランスの生産者たちと世界的市場の現実の状態の間に、隔たりを置くのを、結果として、引き起こす、もっと高く想起された多様の保護貿易主義的な措置は、同様である。しかし、この経済政策は、単に、フランス経済の構造的諸問題の理由で、消極的な結果である。フランスを世界恐慌の最初の結果を保護した、要因自体は、同様に、フランスを不景気から外に出るように禁じる、要因である。そのように、小企業の多数派に構成された、生産装置の構造は、同様である。関税障壁を蔽護されて、小企業は、最良の生産性によって、全国的及び国際的市場を再征服するのに探し求めるために、生産をブレーキを掛けるために理解し合いながら、国内市場について高い物価を維持するのに試みる。国内市場について後退は、フランスの経営者の大部分の古風を表す。不幸に、この市場は、フランスの人口学的な弱点及びフランス人たちの不十分な購買力によって、制限される。多分、人々は、ここで、フランスの恐慌の独創的諸性格の最も重要な説明の要因の一つに関係する。出生率の停滞、戦争に帰すべき人間の喪失の結果、人口の老化は、A＝ソーヴィによれば、経

済について三重の効果を及ぼした。現在のところ及び未来のところ、単に、制限された市場を企業に対して供給して、これらの要因は、企業を膨張の展望から奪うし、企業を投資に、大胆さに仕向けられない。労働力人口を減少して、要因は、賃金、従って、生産の費用の相対的な値上りを引き起こす、活力なしで労働の市場を作り出す。卸値の値上がりは、従って、対外市場のすべての征服を禁じる。要するに、人口の老化は、同様に企業の指導者たちを関係する。もっと年配の、彼らの近代化するように傾向、彼らの進歩への開始は、弱い。指導者たちは、新しさの危険を引き受ける方をほそぼそと暮すようにむしろ好む。さて、われわれは、政府と世論が、単に、人口学の停滞によって提起された問題を及び問題に治療薬をもたらすように不可避性を自覚していることを、検討した。その指導者たちは、もし恐慌が、政府当局者に免れる、要因に帰すべきであるならば、恐慌の延期は、彼らが選んだ、措置の不適合によって説明されることを、恐慌に反対して闘争するために、同様に考察しない。

順応できない治療薬　混乱の感情　彼らが、原因を見分けない、経済恐慌に直面して、フランスの政府当局者は、広く武装解除される。彼らによれば、恐慌は、聖なる管理の方法の放棄に帰すべきである。同様に、結局、一方では、資本主義が、広い使用を作る、貸付け金への訴え（使用は、フランスの心性に不健康なように思われる）、他方では、国家に不振の責任を負わせる、予算の赤字は、非難された。分析は、従って、古風である、そして、フランスの物価と世界的物価の不均等の中で、困難の真の起源を見る、人々は、稀である。そして、政治的理由のためあるいは心性に関係があり、公権力は、それらに恐慌中の大工業諸国が、提案する、治療薬の二つの大きい型を適用することに同意しない。フランスによって拒否された最初の返事は、国を国家の狭い管理の下に外界から遮断して主要なものとして生活させながら、世界的市場の国を孤立させることにある、ドイツの解決法である。漸進的に三一年と三四年の間に配置されて、先ず最初にブリュニング政府によって、次いでヒトラーの時代でシャハト博士によって、返事は、為替相場の厳格な管理を確立することにあるし、欠くべからざる最小限に対して、外国諸国で貿易を減ずることにある。それは、三六年後、自給自足経済の配置に導く。

全国的市場が孤立させて、政府は、全国的貨幣が、外国の外貨と比べてその結果を辛抱せねばならないとは除いて、貸付け金によって刺激された内部の推進を試みることはできる。フランスは、その役割のため、これらの極端な解決法から強く遠ざけられる。伝統によって保護貿易主義者であるのに、フランスは、世界の残りとの、特にイギリス人たちとアメリカ人たちとの連絡を断つことを要求しない。その上、三四年まで、為替相場のすべての管理は、不合理のように見える。その理由は、国は、外貨を不足していない、及び国は、外国の資金を引き付ける。

・平価切り下げの拒否。フランスによって拒否された第二の解決法は、イギリス人たちとアメリカ人たちによって実践された解決法である。平価切り下げ。外国の貨幣に比べて全国的貨幣の相場のこの減少が、表す、利益は、二重である。―国際的市場について、平価切り下げは、外国貨幣に作製された、平価を切り下げた、国の製品の物価を減ずるように可能にする、そして、平価切り下げは、輸出への奨励金を構成する。―全国的レヴェルについて、中央銀行の金ストックの再評価によって、平価切り下げは、内部の推進を可能できる、貨幣の重要な総量を諸政府を勝手に使わせる。特にフランスの背景に適合させた、これらの利点は、P＝レイノーあるいはR＝パトノートルのように、少数の、ある政治家たちが、三四年から平価切り下げを強く勧めることを、説明する。彼らは、平価切り下げが、フランスの物価と外国の物価の間にずれを消滅させる、及び従って、経済恐慌への解決法をもたらすように可能にすることを、強調する。しかし、極右から極左まで、平価切り下げは、万場一致のやり方で拒否される。世論は、実際、銀行家たちとフランス銀行の理事たちによって防衛された貨幣について、正統な見解を分け合う。貨幣の物神崇拝は、当時のフランス人たちが、その貨幣の準備金の総額に対して、国の富を判断するだけ一層多く強い。貨幣の安定は、従って、教義に留まる、そして平価切り下げを強く勧めること、それは、世論と権力の間に暗黙の契約を壊すことである、それは、不誠実な操作に熱中することである。人々は、なぜ、これらの条件の中で、P＝レイノーが、内閣総理大臣たちと相次ぐ大蔵大臣たちの眼で、案山子のように思われたか、及び彼が、三八年まで、あらゆる政府から除名されたことを、理解する。人々は、この平価を切り下げるような

拒否が、二六―二八年のポワンカレの安定化が、結局、一四年まで現に使用されている芽月フランの価値に比べて、平価切り下げ（そして、五分の四！）であっただけ一層多く奇妙であることを、注目する。正確に、そこで、実は、景気の要因は、介入する。二〇年代のフランス人たちは、第一次大戦前の貨幣の安定の追憶の中で、すなわち、中産諸階級に対して、彼らの恵まれぬ人々の生活水準の引き上げ策を考察するように認めた、貯蓄の政策の根拠の中で、生活していた。この展望の中で、貨幣は、同様にフランス社会の社会的価値の要となるものである。そして、第一次大戦の経験は、強い精神的ショックのようにこの計画について体験された。ポワンカレの安定化は、一所懸命に金利生活者たちの貯蓄を着手したし、全国的な貯蓄の主要なものを構成した、資格の価値を削除された、貯金を溶かす。それは、政府当局者が、貨幣の公式の削除の考えを諦めて受け入れられる、実は、意識の騒乱である。二五年に、第一次大戦前の彼の価値のレヴェルに対して、英ポンドの切り上げ、そしてイギリスの貨幣の金価値へのこの復帰によって引き起こされた、経済恐慌を後を追った、社会的騒乱は、フランスの政府を同様に危険な例を従うように思い留まらせた。少なくとも、人々は、フランスに、平価切り下げが、戦争が、存在する、例外的な事件のため支払うべき財政に関する値段であることを、考察する。しかし、一度この借金が、返済された、フランス人たちは、【一フランから四スーまで】減らしたベースについて、社会に本質的な、この安定を見出すことを要求する。人々は、辛うじて、人々が、平和の時期に、再びこの例外的な手続きに訴え得るように、理解する。恐慌の深遠な理由に対して攻撃させるように拒否して、諸政府は、従って、不景気の結果を収拾するような単独の目的の中で、矛盾した結果に対する行動を企てるのに非難される。この政策は、三つの軸の周りに組織される。外国貿易に関する行動、恐慌によって関係された集団の収入に関する行動、予算に関する行動。

外国貿易に関する行動、関税の治療薬　問題は、ここに、金に比べて主な貨幣の価値減少の外国の製品に対して結果として生じる、強い奨励金を犠牲にして、どのように外国の競争に反対して闘うかという知ることである。第三共和制以来、フランスは、ある数の国々と通商条約の署名によって修正された、そして国々に最も恵まれた国家の条項の恩恵を浴する

ように認めて、穏和な保護貿易主義の政策を実践した。恐慌に直面して、フランスは、先ず最初に、古典的な保護貿易主義の措置の兵器廠を使用する。三一年七月、九月と一二月に、農業製品について、次いで三二年三月に、工業製品について、関税の再建。この政策は、結果なしに留まって、フランスは、国を一八六〇年に始められた自由な時代で前の構想に連れ戻して、もっと峻厳な手段を利用する。―それは、先ず最初に、国々の貨幣を平価を切り下げた国々に反対して、為替相場の付加税の制度である。そのように、人々は、イギリスの製品に対して、三一年一一月と三四年六月の間に一五％の従価税の付加税を適用する。古い金物価と平価切り下げの結果として生じる、新しい物価の間の相違を再建することが、問題である。措置を蒙る、及び報復の措置を取るように脅かす、国々によって差別的な措置のように告発された、フランスは、その競争が、フランスの経済に対して危険を伴って判断される、製品についてもっと選択式の措置を採択するため、それを放棄するに至る。―それは、次に、割当の制度である。ある数の輸入された製品の全体的な総量を、先験的に、固定することが、問題である。三一年夏から、窒素を含む製品と石炭は、これらの措置の対象である。三二年に、それらの製品は、工業製品のほぼ全体に対して広げられる。ある数の場合の中で、国家は、もっと遠くに行き、輸入業者たちに対して、別の国家を犠牲にして、ある輸出する国家を恵まれながら、外国貿易について狭い管理を行使するように認める、許可を交付する。―最後に、フランスの政府は、三四年に、ドイツで、為替交換の協定を通すように受け入れる。直接の支払なしで商品の為替相場、会計年度の終わりに解決される前に補償になる収支バランスを認めるように、輸入の価値と輸出の価値の間の対応を確立することが、問題である。その間に、各政府は、その全国的な輸出業者たちを支払い、外国の製品の輸入業者たちをなされる。ドイツの方にフランスの原材料の輸出を優遇するように署名された、フランスの政府は、過大に評価されたマルクが、ドイツ帝国の中でフランスの購買を落胆させられて、これらの輸出の制限に辿り着く。それは、だまされた人たちの市場である。しかし、為替交換の組織は、外貨のストックのない国々、特に中央ヨーロッパの国々と効力のあるままである。この措置の全体は、輸入を制限するのに貢献する。貿易均衡の赤字は、事実上減らす。

しかし、措置は、明白に経済の全体に有害である、フランスの貿易の一般的な短縮に辿り着く。この領域の中で、反恐慌闘争は、従って、フランスが、国際的渦を避けるため、それ自体についてほそぼそと暮すように選んで、世界の経済的舞台の国の後退を経験する。

恐慌によって関係された集団の収入に関する行動　・農業の中のマルサス主義の政策。平価切り下げが、排除されて、短期間について、恐慌の社会的効果を修正するよう試みるより、すなわち、景気後退によって関係された集団の収入の下落を制限するより、もっと別の政策は、あり得ない。公権力によって優先権を持つと判断されたグループは、農民たちのグループである。努力は、生産を減じながら鍵たる製品の相場を支持することにある。政策は、三四年まで強情に続けられる。政策は、先ず最初に、フランスの農業の支柱、小麦の生産に掛かる。三二年に、素晴らしい収獲（九、〇〇〇万のキンタル）の後に、政府は、従って、フランスの市場を世界的市場から孤立されて、小麦の輸入を公式に禁じる。しかし、相場の差違を考慮して、フランスの穀物栽培者たちが、輸出するようにできないように、それでも、国内市場について過剰生産をする。市場について供給された総量を減らすため、政府は、当時、農民たちに対して、三三年に、一キンタルの一一五フランで固定された最小限の値段を保証するよう認めながら、在庫保管を奨励する。そうしながら、公権力は、単に、次の収獲が、不作である、及び当時、相場の崩壊を引き起こさないで、ストックされた総量を解放することは、できる希望で、問題の解決法を延ばさせる。不幸に、三三年の収獲は、素晴らしいし、ストックは、積み重ね続ける。金が不充分な、農民たちは、むしろ低い値段（割引、奨励金）で彼らの小麦を売る方を好む。それは、パンの値段が、人工的に高いままであるのに、その値段が、三四年に、一キンタル、六〇あるいは七〇フランで落ちる、『ギャング小麦』である。その理由は、値段は、小麦の一キンタル、一一五フランの理論的値段によれば、固定される。ぶどう酒の領域の中で、マルサス主義の政策は、なおもっと人目を引く。三二年から、政府は、ぶどう園の新しい作物と余りにも生産的なぶどうの苗を禁じる。罰金は、その収獲が、余りにも大きい、ぶどう栽培者たちを襲う。根こぎへの奨励金は、提供される。無駄

である。輸出への奨励金は、大成功なしである。国家は、費用の一部を支えながら、精油所へぶどう酒を転売するため、ぶどう酒の蒸留を奨励しようと努力する。しかし、三六年に、三九年に同様に、ぶどう酒の過剰生産の問題は、元のままである。最後に、ビートの生産に関して、政府は、生産者たちを保護するため、砂糖の輸入を割当額を決めるし、ビートと砂糖の生産者たちの間の協商を義務的にする。ぶどう酒に対すると同様に、国家は、ビートが、フランスに生産されたアルコールの三分の二を提供して、蒸留によって黒字を吸収する。

・商業と工業の中の恐慌の犠牲者たちに対する支え。農業領域の中で、国家が、すべての構造的改良を避けながら、小土地所有者を保護するように選んだと同様に、国家は、経済恐慌の主な犠牲者たち、小商人たちと小企業者たちを支えるだろう。そのように、一連の法は、チェーン商店の発展に反対して小商業を保護する。資本主義的大企業に対して、政府は、その対象が、相場の下落をブレーキを掛けるように競争を制限することである、工業の協商を奨励する。従って、正常な状態で、現存の企業を維持することが、問題であるし、経済的構造の近代化に奨励することが、問題とならない。公権力の本質的な不安は、失業の増加を避けることである。このレヴェルについて、国家の調停は、大英帝国にあるいは合衆国に、そして、なおさら、ドイツによりもっと重要ではない。主要なものは、二九年に、タルディユーによって提案された、しかし異なった目的で、全国的設備の計画を取り戻すことにある。計画の経済的推進の手段を作ることが、問題である。三一年に、四兆一、四六〇億フランは、全国的設備として議会によって可決される（その中、公教育に対して九億一、一〇〇万フラン、農業に対して九億七、八〇〇万フラン及び公共事業に対して一三億五、五〇〇万フラン）。その上に、三一年の法は、政府に対して、三四億七、六〇〇万フランに対して、国庫の義務を表明するように能力を与える。人々は、もう一度余計に、反恐慌闘争の政策が、原因に攻撃されるなしで、結果に収拾しようと努力することを、確認する。従って、行われた費用の大部分は、国の経済的需用に応じてではなくて、失業の配分に従って、向けられる。優先権は、極く僅かな輸入を引き起こす、及び失業によって最も関係された地方を関心を惹く、諸産業に与えられる。人々は、従って、政府の

行動を特徴づける、短期に見解によって、及び恐慌の全体的分析の欠如によって襲われる。同じ観察は、予算に有効である。

予算に関する行動、デフレーション政策　政府が、恐慌に反対して闘争するように、農業と工業の領域の中で、ある数の費用を掛かり合いにさせる時に、政府は、予算の赤字を減ずるように心を砕いている。

・デフレーション政策の矛盾。恐慌に責任があるという判断される、予算の不均衡（それは、逆に、恐慌が、引き起こす、活動の下落によって、余波によって、予算の赤字を引き起こす、恐慌であることを判断する、人々は、稀である）。立派な管理の同義語、均衡の道を見出すことが、問題である。この目標は、不充分な耐え難い、インフレーションが、フランの安定を脅かして、賭けられない貨幣の設立を避けるため、欠くべからざるものと判断される。この計画について、ケインズのテーゼは、フランスに普及しなかったことを注目しよう。貨幣は、経済の役に立って道具として考えられない。フランの防衛は、逆に、絶対的な優先権である。要するに、予算は、反恐慌闘争の手段であるはずである。その固有な費用を減らしながら、政府は、例証を証明する、及びデフレーションを奨励するのに試みる。平価切り下げが、排除されるので、この政策は、物価の低下を引き起こす、及びフランスの製品の競争力を改善するため、唯一の実行できるもののように見える。政策は、三つの注目を呼ぶ。－先ず初めに、政策は、厳格に、例えば、人々が、相場を上ぼらせるのに試みる、農業の領域の中で続けられる、政策の正反対のものである。事実、デフレーションは、政府の農業政策を失敗に導く。－政策は、全体的に非現実的なものである。その理由は、物価の約二〇％の低下を手に入れる必要があろう。人々は、予算の費用の半分が、抑制できないことを承認するのに。それは、別の半分の受益者たちに対して、徹底的な低下を要求するのに戻る。－最後に、持続的な政策は、関税障壁を蔽護されて、国内市場について後退の選択を考慮に入れて支離滅裂なものである。デフレーションが、世界的物価のレヴェルにフランスの物価を連れ戻すのに成功しないので、政策は、需要の減少及びますます恐慌を維持する、国内市場の麻痺を引き起こす。

・人気のない措置。これらの制限にも拘らず、それでも、デフレーションは、三一―三二年にラヴァールあるいはタルディユーのような右翼家たちが、エリオ、ポール―ボンクール、ダラディエ、サローあるいはショータンと一緒に、三二―三四年に政権の座に接近する、左翼が、次いで、再び三四年と三六年の間に、ドゥーメルグ、フランダン次いでラヴァールと一緒に、右翼が、問題である、相次ぐ内閣総理大臣によって唯一の可能な政策として考察される。どのように、このデフレーションの政策は、表現されるのか。三五年まで、相次ぐ政府は、鍵が、官公吏たちの給与の及び在郷軍人たちの恩給の減少であった、かなり内気の一連の措置を取った。三〇年に、タルディユーは、官公吏たちの給与を引き上げた。さて、この日付以降、生活費は、低下し続けた（三〇年と三三年の間に一〇％だけ、三〇年と三五年春の間に二一、四％―家賃を含めて―だけ）。結局、ある数のフランス人たちの所得が、恐慌の事実から当然、崩壊されたのに、官公吏たちは、彼らの購買力を増加しているように見えた。同様に、ダラディエは、三三年二月に、公職の中で賠償金の減少を付け加えられた、年毎に二万フラン（タイピストは、一万二、〇〇〇フランを支払われる）を超過した、官公吏たちの給与について特殊な先取りの採択を手に入れる。数か月後に、三三年一二月に、ショータンは、一万二、〇〇〇フランより上の給与に対して、一、五％から六％まで、先取りを予測する（六％の率は、単に、四万フランより上の給与に達したので）、新しい計画を会議によって採択させる。三四年二月後、政権の座に戻られた、右翼は、慎重に官公吏たちをますます準備しないし、三四年四月に、G＝ドゥーメルグは、定員数の削減によって実現するのに、あらゆる閣僚の職員たちの予算について一〇％の減少、あらゆる官公吏の給与について五％の最少の先取り、二万フランの上に、六％から一〇％までの率に従って、累進的になる先取り、最後に市民的及び軍事的恩給の減少を決定する。この次々に続く起こる措置は、従って、恐慌の搾取者たちと同様に世論に指定された、及び彼らの購買力の中で告発された、官公吏たちの怒りを激化させる。政府が、行動を企てるはずであると思う、第二の部署は、在郷軍人たちの恩給の部署である。部署は、このデマゴギーの決定からタルディユー政府に無理矢理に引き離した、議会によって恐慌の前夜に確立された。もし政府は、恩給が、欠くべからざる性格を帯び

ないように判断するならば、政府は、在郷軍人たちの抵抗に衝突する。どのように、内閣総理大臣は、人間たちを再編成する、結社と衝突できるのか。政府の最初の計画は、権力が、むしろそれに断念するより好む、かかる反対をかき立てる。しかし、三四年四月に、ドゥーメルグ政令は、戦争の恩給及び戦闘員の退職年金について、三％の一時的先取りを決定する（大きな傷痍軍人たちを除いて）。措置は、深い感動を引き起こす。官公吏たちに対して同様に在郷軍人たちに対して、先取りが、生活費の低下に比べて安いものであることは、注目する必要がある。しかし、A＝ソーヴィは、それを注目させるように、もしこの低下が、現実的になるならば、低下は、論稿に従って不平等であるし、そのようなものとして下部組織で見分けられない。その上に、給与の名目的価値のすべての減少は、支えられない。減少は、サラリーマンの威厳への打撃として理解される。もしデフレーションの政策が、従って、いら立ちを生み出すならば、いら立ちは、三五年七月、八月と一〇月のラヴァールの緊急政令によって、その頂点に、もたらせるであろう。緊急政令は、国家のあらゆる費用（官公吏たちの給与、恩給、公の負債の利子）の一〇％の一般的削減を押し付ける。同じ措置は、家賃の、ガスの、電気の物価に、公の及び民間の借入金に、農地の賃貸借契約に、自由職業の印税及び俸給に広げられる。もし民間部門の給与が、一〇％の一般的低下に従うならば、課税の減少、鉄道交通機関の値段の削減は、あり得ない。効果は、フランスの物価と国際的物価の不均等について、非常に弱い。そして三五年のように、世界の残りの中で、再開の年は、存在する。物価は、その効果を演じさせるようにデフレーションに禁じる、値上げへの傾向で苦しめられる。予算の問題については、その問題は、だからと言って解決されない。もし費用が、事実上安定化されたならば、デフレーションが、その邪悪な結果によって、フランスに恐慌を延長して、収入の下落は、なおもっと重大であるし、赤字は、増加する。再び借入金に訴える必要がある。三五年に、公の負債のサーヴィスは、費用の四〇％を表す。

フランスの遅れの暴露　世界経済恐慌は、従って、二〇世紀の世界の現実に対して、フランス経済の構造の大部分の不適応を明らかにする。最初の時期の中で、不景気の最初の結果を蔽護して国を維持しながら、保護する役割を行使する、

しかし恐慌を外出するように国を禁じる、不適応。膨張の恐怖、農業の及び工業装置の部分の動脈硬化、減らした国内市場を留保するように見られるのに、企業の多数の指導者の熱望、しかし、保護された、及び結果として、危険の、競争の、投資について賭けの拒否は、人々が、人口学的老化で及びフランスのマルサス主義でもたらすはずであると同様に基本要素である。構造の遅れに、心性の遅れは、照応する、そして観察は、指導する職員に対して同様に多数の世論に対して有効である。経済的現象の無理解は、誰が、はっきりと恐慌の現実のデータを見分けないし、敢えてフランスの物価と世界的相場の間に不均等が、存在する、本質的な仕組みに攻撃させないようである。世界恐慌は、三五年頃に和らぐ時、それは、国内市場を圧迫しながら、国の中でその結果を延ばす、フランス諸政府のデフレーション政策である。

経済恐慌の社会的結果

収入の一般的動き　第三共和制の下にフランス人たちの収入について、大きな統計の不正確を考慮に入れて、経済恐慌が、色々な社会職業的グループを襲った、やり方の正確な考えを、作られることは、非常に容易ではない。せいぜい、経済的レヴェルについて同様に社会的レヴェルについて、恐慌が、選択式の性格に帯びたことは、明白のように見える。後天的に入手できるデータを分析しながら、同時代人たちの判断と経済学者たちによってなされた評価は、首尾一貫した表を提案する。従って、実は、彼の書物、人民戦線と一九三六年の国政選挙（A＝コラン社、六九年）の中で、G＝デュプーは、経済学雑誌のためにデュジェ＝ドゥ＝ベルノンヴィル Dugé de Bernonville によってなされた、及び三六年に出版された、収入の発展の年次の評価を利用する。総数が、二九年に二、四五〇億フランから三五年に一、七二〇億フランまで移って、これらのデータから、三〇％のレヴェルで配布された、収入の下落は、生じる。A＝ソーヴィ（両大戦間フランス経済史、二巻（三一―三九年）、パリ、フェイヤール社、六七年、一三七頁）は、額面に及び真価に収入の発展を立てる。人々は、収入の全体に関して、人々が、先例の近い数字に辿り着くように確認する（額面に三〇、五％の損失、真価に八、五％の損失）。実際には、これらの平均した数字は、色々な産業部門と社会的グループの間に重大な不均等を取り戻す。もし恐慌が、犠

牲者たちを作ったならば、恐慌は、同様にその受益者たちを持っている。

恐慌の受益者たち　三つの社会職業的グループは、これらの収入が、絶対的数字（地所の及び不動産の収入、恩給と退職年金）に増加を知っていたにせよ、彼らの名目的価値の下落が、物価の低下より下であったにせよ、恐慌の年月の間に彼らの現実的な収入を増加した。矛盾して、これは、値上げにこれらの現実的な収入の受益者たちである、第一次大戦の終わり以降、困難に現れる、グループである。そのように、紛争の終わり以降、ほぼ凍結を知っていた、土地のあるいは不動産の地代は、三〇年と三一年に、恐慌の前夜に、相対的な値上げを知っている、そして三四年から始まる。低下は、正確に物価の低下より下の、単に、非常に弱い。恩給と退職年金に対して同様な観察。恩給等は、二〇年代の初めの間にほぼ停滞を蒙った。二六―二八年の貨幣の再調整は、生活費の切り上げを引き起こしたし、この事実から、恩給と退職年金は、三一年に調整策を熟知する。更に、人口の老化は、この資格に対して配布された大勢の収入を増加する。要するに、これらの収入の削減に対して、労働組合と在郷軍人たちの結社の強い抵抗は、収入の低下をブレーキを掛ける。しかし、これらの『恐慌の受益者たち』の中で、人口の残りに対して壊滅的な状況の搾取者たちを見るのは、間違ったであろう。その収入は、二〇年代の間に現実の悪化を知っていた後、恐慌の前夜に再調整された、及びその獲得した謙虚な人は、恐慌にも拘らず留まった、集団が、問題である。それに反対して、二〇年代の間に彼らの収入のこの悪化を知っていなかった、自由職業は、疑いもなく、統計表が、悪化を指定しないよりもっとはっきりと受益者たちである。これらの最後の統計表は、実際、利害関係者たちの税務の宣言の上に建てられる、そしてわれわれは、脱税が、著しいものとして義務がある、産業部門の中にいる。この留保が、別にして、公然たる収入は、三二年まで留まる。三三年から、人々は、いずれにせよ、物価の平均的な低下より下の、軽い低下を確認する。その結果、購買力の言い回しで。A＝ソーヴィは、二〇年代の停滞を知らなかった、自由職業の収入に対して、六、七％の利益は、存在することを、考察できる。それは、従って、経済恐慌によって容赦された、及び恐慌のお陰でその諸条件の改良を知っていた、フランスの社会の保護された産業部門である。

しかし、結局のところ、恐慌の受益者たちは、重要な、彼らの犠牲者たちの数から見れば、単に、フランスの社会の貧弱な周辺部にいる人々を代表する。

恐慌の犠牲者たち　労働力人口のほぼ全体を構成する、三つの社会的グループは、経済恐慌によって打撃を受けられた。サラリーマンたち、実業のブルジョワジー、中産諸階級。

・サラリーマンたちは、二九年と三五年の間に、平均して二五％から二八、五％までのレヴェルの彼らの収入の下落を知っていた。しかし、これらの数字は、異なった地位に対してグループを取り戻す。例えば、工業労働者たち、官公吏たちあるいは農業サラリーマンたちの収入は、同じ進展を知らなかった。従って、分析を精緻化する必要がある。工業労働者たちに関して、人々は、時給が、二九年から三一年まで（一〇〇の指数から一一一の指数まで）増加したし、労働組合から賃金のすべての低下までの強い抵抗によって、三二年と三五年の間に（一〇六の指数まで）非常にゆっくりと衰えたということは、確認する。時給の購買力は、従って、恐慌の年月の間により良くなった。しかし、労働者の世界に対して、真の問題は、他の場所である。問題は、三六年の初めに四六万五、〇〇〇のサラリーマンたち（公然たる失業者たちが、問題であるし、疑いもなく、完全失業者たちの現実の数を持っているため、殆んどこの数字を倍加する必要がある）を襲う、失業の中にあるし、二九年に四八週時間に反して三五年に四三、九週時間で平均して確立させる、労働時間の短縮の中にある。これらの条件の中で、民間企業のサラリーマンたちのグループの現実的な収入は、低下しつつある。従って、実は、工業と商業の中で、二九年と三五年の間に大勢の配分された賃金は、一〇〇の指数から六九の指数まで移る。失業も労働時間の短縮も知らない、及びこの事実から、恵まれた人々のように思われる、官公吏たちの状況は、あらゆる点で、異なっている。彼らの給与は、二八年と三〇年の間に敏感なやり方で（一〇％から一二％まで）引き上げられたし、三二年まで安定したままであった。デフレーションの政策の事実から当然、単に、三三年から、実は、これらの収入は、削除を知っている。下級の官公吏たちの給与は、約一三、六％で減らされるし、上級の官公吏たちの給与は、一七、六％で減らされる。しかし、

購買力の言い回しで、全体として官公吏たちの現実的収入の維持が、ある。それにも拘らず、名目的賃金の減少は、彼らにあっては、非常に激しい不満及び彼らの見地からすれば、権力の嫌がらせ、とりわけ三五年のラヴァールのデフレーションで、世論によって承認された嫌がらせの感情を引き起こす。最後に、農業サラリーマンたちの状況は、有名でないままである。失業は、農業の仕事を実行するため、充分な農業の労働力の維持の不可避性によって、工業のサラリーマンたちの世界の中でよりもっと宣告されなかったように思われる。賃金については、失業は、三五年まで弱い減少を蒙る、しかし、物価の低下を超過したように見えない。

・実業のブルジョワジーの収入の下落は、資本の収入の進展の考慮によって、評価されるかも知れない。平均して、動産の収入の低下は、二五％で評価される。この数字は、それにも拘らず、一つの産業部門から別の産業部門までの対照をなされた状況を取り戻す。三六年に、経済学雑誌の中で公表された研究の言い回しを取り戻して、G＝デュプーは、従って、三つの企業の集団、大公共事業の集団、カルテル化された産業部門の集団及び保護されていない企業の集団を識別する。公共事業（ガス、水、電気、都市の交通機関……）は、独占企業の恩恵を浴するし、国家と協力して公共事業の物価を固定する。公共事業は、従って、競争を蔽護している。公共事業の利益は、生活費が、減らすのに、三四年まで留まるあるいは増加する、そして公共事業は、彼らの株主たちに対して、もっと重要な配当を配布する。単に、三五年に、実は、料金の一〇％の低下に導く、デフレーションは、当時まで、人目を引く発展を遅くする。この企業グループは、従って、恐慌を利用した。カルテル化された産業部門（化学、冶金、ガラスのように、大企業の産業部門）は、恐慌の最初の局面によって驚かされたし、二九年と三二年の間にその利益の重大な下落（配布された配当の三一％の下落）を記録した。しかし、三三年から、その組織は、産業部門を不景気の結果を克服する、及び再び三四年と三五年に値上りで配当を配布するように可能にする。それは、従って、その困難が、動産の資金の収入の二五％の下落を報告する、保護されていない産業部門、孤立された企業の産業部門である。二九年から三五年まで、産業部門は、配布された配当の下落が、これらの二つの日付

の間に約七〇％であるので、真の崩壊を知っている。それは、二つの別の産業部門が、進行するあるいは留まるのに、経済恐慌の値段を支払う、この産業部門である。

・独立した中産階級は、経済恐慌によって最も関係された集団の一つである。小商人たち、小工業家たち、農民たちは、実際、最も打撃を与えられる。商業と工業の利益に関して、名目的収入の下落は、約四〇％の周りに変動する。それは、購買力の期限に、一八％から二〇％までのレヴェルの現実的収入の低下を表す。われわれは、ここで、保護されていない産業部門に所属して、中小企業の世界（集団の所轄である別の動産の資金）の前にいる。中小企業は、散り散りにされる、単に、制限された資金から解放する、及び莫大な金の懸かる競争に熱中する。この産業部門の中で、実は、人々は、破産と更生整理の大部分を記録する。更生整理は、月一回の平均して、二九年に約七〇〇であった。更生整理は、三二年に一、一〇〇以上に達するし、三四～三五年に約一、二五〇に達する。恵まれぬ人々の生活水準の引き上げ策の希望によって動かされた、商店と小工業の世界は、それらの希望を恐慌で崩壊するように見える。農業の中小経営者たちの状況は、疑いもなく、たとえ統計表が、建てられる、税務の宣言が、完全に信頼できるものとして考察され得ないとしても、なおもっと悪い。いずれにせよ、農民たちの収入の下落は、名目的価値に、五〇％から六〇％までであり、現実的価値に、三〇％から四〇％までのレヴェルである。真の崩壊は、農民の世界から、経済恐慌の主な犠牲者を作る。赤字が、三四年から現実であるし、当然、深遠な不安を感じる、産業部門。事実、中産諸階級のこの収入の下落は、フランスの恐慌の政治的及び精神的均衡の中で重要である。結局、従って、打撃を与えられた、グループは、第三共和制の社会的基礎を構成した、グループ、社会的上昇の希望を表した、グループである。グループを襲う、困難で、それは、共和制が、疑問視される、使者であった、社会的約束の全体である。そして、それは、なぜ社会的危機は、制度の価値について質問と制度の完全な一致は、経済恐慌の最初の徴候の前に提起されただけ一層多く深遠な、政治的危機の主なモーターのように思われるかである。経済恐慌は、単に、その原因が、第一次大戦にさかのぼる、共和的考えと政治的イデオロギーの危機を、住

民の中で深く究明させる。

三　三〇年代のフランスの中で政治的危機

三一年にフランスを打撃を与える、経済的及び社会的危機は、その規模の大きさの理由としてではなくて、危機が、その政治的制度の有効性について途中で止める、危機が、第一次大戦の前夜に世界の全体に対して、提案できるように信じた、自由民主主義のモデルの特質の中で信頼を失った、国と関係がある理由で、重大な性格を帯びる。さて、三〇年代の初めで、フランスの政治的体系は、非常に広く行き詰りの中で手詰りのように現れる。

麻痺させられた及び信用を失わせられた政治的体系　フランスの政治的制度を打撃を与える、恐慌の奥行を理解するため、制度が、紛争の前夜に享受した、特別の好意の措置を講じる必要がある。全体として、フランス人たちは、もし人々が、大勢の世論（アクシオン＝フランセーズの何一つ欠けていない民族主義者たち、労働総同盟の革命的サンディカリストたち）に極く僅かに食い込む、狭い少数派を別にするならば、彼らを可能な制度の最良のように見える、共和的制度に対して結集させる。同時に、普通選挙によって、制度が、主権を有する人民に対して、その政府当局者を選ぶように認める以上、制度は、民主主義的ではないのか、そして制度が、各個人に対して、基本的自由の行使を保証する以上、制度は、自由主義的ではないのか。とても完全な制度なので、フランスは、その制度を、フランスが、道を開いた、制度は、進歩の道に掛かり合うのにつれて、完全な世界に対して例として提案できる。この感情は、制度が、勝ち誇って戦争の試練を克服した、事実によって、第一次大戦の直後に強化される。いずれにしても、勝利の直後に、フランス人たちは、政治的レヴェルについて、二重の熱望を表明する。制度の伝統的実践に戻るため、戦争の政府の括弧を閉じること、及び戦争が、もたらした、幸せなこの更新の実践を豊かにすること。特に、神聖同盟が、戦争の時期の間（社会党員たちにとって除けば）、制度の

周りに紛争の前に実現されたほぼ合意を強化した以上、なぜ諸政党の闘争に終わらせないのか、及び平和の中で、戦争が、押し付けた、統一を実現するのか。さて、全国的統一の中で、去年の制度へのこの復帰の意思は、完全な失敗を確認される。その結果、三〇年代の初めで、フランス人たちは、制度の中ですべての信頼を失った。

第一次大戦後の企ての失敗　三つの相次ぐ経験の失敗は、政治的制度の再疑問視のこの動きの諸段階をマークする。

・一九年に試された、国民ブロックの経験は、平和の時期に、戦争の時期の神聖同盟を続けられようとした。紛争の間に政府の多数派に協調した、右翼から急進党員たちまで、あらゆる政党を結集するのが、問題であった。一七年九月に、神聖同盟から引退した、社会党員たちは、単独で排除される。事実、同盟の一体主義の性格は、実践に抵抗しなかった。単に、中道派と右翼の連合であった、問題に対して、左翼の保証を提供することを切望していない、急進党員たちは、組織に関して連合に参加するよう拒否した、そして、単独のある孤独な人たちは、国民ブロックの名簿に載っていた。人々は、従って、中心点が、右翼の方へ位置づけられた、政治的性格の連合の前にいた。そして、それは、国民ブロックの諸政府が、続けた、右翼の政策である。更に、国民ブロックは、政治的レヴェルについて、国際的レヴェルについて、経済的と財政的レヴェルについて、その第一次大戦前の状況に国を引き戻すことはできなかった。紛争によって生成された乱れは、全然経済情勢の現象ではなかった、しかし人間たちの意思を逃れる、構造的レヴェルの変動であった。失望した、フランス人たちは、二四年に左翼を考慮して投票する。

・左翼連合の経験は、二四年から二六年まで、第一次大戦前の確認された価値に対して、無条件の復帰の展望の中で登録する。その先頭に急進党と一緒に、勝利を得た左翼は、世紀の初めの左翼ブロックの経験、すなわち、急進党の周りに、社会党員たちと穏和派を結集して、急進主義が、戦闘的反聖職者至上主義の武器で制度の防衛のための闘いを繰り広げた、黄金時代を再刊するように願う。経験が、ほぼ全体的な失敗に通じるために、辛うじて二年以上の年月が必要である。急進党員たちの財政的政策への実業界の反対と、経済及び社会に関して、取るべき措置について、急進党員たちと社会党員

たちの間の不一致は、経験の失敗を引き起こす。二六年から、『金の壁』に直面して、連合の崩壊は、時期が、変わった、及び黄金時代への復帰が、幻想を抱かせる、フランス人たちを説得するように貢献する。少なくとも、国民ブロックが、一九年に無駄に確立するよう試みた、急進党員たちから右翼まで、この国民連合は、連合の廃墟について実現する。

・二六年から三二年まで続く、国民連合の経験は、直ちに導くのに困難であることが明らかになる。二八年から、右翼の諸勢力によって支配された連合と一線を画することを切望している、急進党員たちは、国民連合に引退したし、三〇年代の初めに、右翼が、政権の負担に留まって、経験は、急進党員たちなしで続けられる。しかし、病弱で、二九年に引退した、ポワンカレの後継者たち、タルディユーとラヴァールは、元共和国大統領によって描かれた道の中で追い求める。国民ブロックの右翼の経験と連合の左翼の経験の後、フランス人たちは、野心のない、自分が賢明であることを願う、共和国の管理の経験を作り上げる。進行中の計画の要点、社会保険の要点は、殆んど完全に採択される。残りについて、人々は、共和国を行政を行うように満足する。繁栄の時期にフランス人たちにとって受け入れられる、この事態のヴィジョンは、恐慌に直面して、不充分なものとして判断される。ヴィジョンは、停滞と退嬰主義の根源である。三二年の国政選挙は、フランス人たちの増大する不安及び深遠な変化への彼らの熱望を明らかにする。

三二年の国政選挙への急進党員たちの勝利　三二年の国政選挙は、左翼に対して、かなりはっきりした勝利を表す。先ず初めに、票で勝利、その理由は、勝利は、右翼について一〇〇万以上の票で勝つ（四八九万五、〇二三票対三八八万〇、七一七票）。次いで、議席で勝利、その理由は、一二人の共産党員たちを抜きにして考えながら、左翼は、右翼に対して二五九議席に反して三三四議席を合計する。票と議席の配分は、他方では、勝利を得た連合の内部に、急進党員たちの良い投票結果を証拠立てる。政治的経験が、二四―二六年に左翼連合の時、完全な失敗を明らかにした、急進党は、六年後で、フランス人たちの希望の使者のように思われることは、どのように説明するのか。説明は、複数である。最初に、急進党の勝利は、何よりも先ず、右翼の敗北である。経済恐慌に直面して、三一―三二年に穏和派によって描かれた解決法は、不適当に見

えた。第二に、急進党は、少し異なった様相の下に現れる。実際、急進党は、刷新の重要な流れ、その目標が、第一次大戦後のフランスの新しい諸問題に対して及び現代的思想に対して、古い急進党の原理を適用させることである、青年トルコ派の流れによって、歩き回られる。たとえ青年トルコ派が、防衛する、思想のインパクトは、知識人たち、特にパリ人たちの制限するグループに限られるとしても、青年トルコ派は、古い伝統的な急進主義（急進党の主張）の改革者たちの様子をするし、三一年に彼の政党の議長の職務を取り戻した、E＝エリオは、彼が、青少年のイメージから及び彼らが、世論に提供する、活力から引き出し得た、あらゆる利益を検討した。同様に、三一年の急進党大会は、若い急進党員たちを名誉に検討したし、彼らのテーゼを演壇の特別の好意を持って検討したし、彼らの指導者たちを閉会の宴会の名誉ある場所に出席して、及び彼らの間の幾人を党の全国局に対して彼らの入会を作って検討した。しかし、これらの同意のマークが、与えられた、エリオは、伝統的な急進主義で代表しながら、その先に進むように用心したし、それは、彼の選挙のキャンペーンの基礎を構成した、宗教から独立した思想である。その間に、エリオが、別の党の言うなりにならないで、国に対して、単独の急進主義の解決策を提案したいと確認した、キャンペーン。タルディユーの集中の同盟の申し出に対して、はっきりした拒否によって、エリオは、答えた。反恐慌闘争の綱領のブルムの諸提案に直面して、エリオは、沈黙を対照させた。穏和派に反対して及び社会党員たちに反対して、エリオは、議員たちが、この綱領を結集するのにあるいは恐慌を開くように責任を取るのに招待されたし、急進党の思想について中道派の解決法を提案する。それは、エリオが、三一年の市町村のキャンペーンの時、リヨンで勝利させた、解決法である。それは、エリオが、三二年に国に対して提案する、解決法である。しかし、リヨンで起こった、問題と違って、急進党の選挙当選者たちの多数派は、社会党の得票の彼らの名前について移動のお陰で、指定された。その結果、『単独の急進主義』の政策は、議会への左翼多数派の存在を伴う。この矛盾は、三二年に始まる、急進党の経験の伸し掛かるし、矛盾を失敗に導くであろう。

行き詰りの中で急進党政府　E＝エリオは、その経験を願ったように、三二年と三四年の間に、権力の行使の急進党の

経験は、容赦ない破産に通じる。左翼連合の時期で、急進党は、社会党員たちに対して、急進党の政府の経験の失敗を帰属した。社会党員たちは、急進党員たちを統治するように妨げた。経済的及び財政的レヴェルについて彼らの競り上げによって、社会党員たちは、世論を狼狽させたし、同時に資金と実業界の不信を引き起こした。要するに、社会党員たちの責任がない内容空疎な駄弁は、二六年七月に、急進党政府に貯蓄家たちの怒りの前に、場所を譲るのを強制して、『債券の受取人たちの国民投票』に通じた。三二年に、急進党員たちは、連合の時期で同様に社会党員たちに結ばれることなしで、統治するように決定した。実業界に信頼を吹き込むため、エリオは、レオン＝ブルムの声によって、『大資本』に関係する苛酷さの措置を付け加えられた、大衆の購買力の増加によって強く推進を勧める、社会党員たちの大きな怒りに対して、穏和派によって始められたデフレーション政策を続ける、ジェルマン－マルタン Germain-Martin に大蔵大臣を託すように決定する。人々は、集中の政府の及び左翼の議会多数派の並置を持っている。政府とその多数派の社会党分派の間に、経済的及び財政的諸問題について、解けない矛盾は、存在する。急進党員たちと社会党員たちは、『左翼で』言われる、しかし、用語は、皆にあっては同じ受諾を持っていない。急進党に対して、『左翼で』あること、それは、制度に関して、議会の優位性を承認する、政教分離に、漸進的な社会的改良主義に忠実であることである。社会党員たちは、確かにこの定義を受け入れる。先に進む必要がある。資本主義に終わらせるため、強権的な道によって社会の諸構造を変えること。今のところ、人々は、同じ方法によって、市場の法則を不安にしないで、諸改良を実践できるし、あるいは財政的諸困難を解決できる。さて、基本的に自由主義者たちである、信頼と自由主義的経済のメカニズムが、経済的生活のモーターに留まることを判断して、急進党員たちは、全然急進党員たちをこの道の中で従うことを、及び正統の道から離れることを要求しない。急進党員たちにとって、予算の均衡、貨幣の価値の維持、貿易の自由、供給と需要の自由なゲームは、人々が、背くことができない、変更できない教義である。この領域の中で、社会党員たちと急進党員たちの間に、無理解は、全面的である。左翼の多数派のメンバーたち、急進党員たちと社会党員たちは、従って、従うべき政策に反対

する。それは、先ず最初に、エリオと一緒に、政権の座にいる、急進党員たちであるように。次いで、別の政党のリーダーたちで、それは、採択される、デフレーションの自由主義的経済政策、すなわち、リーダーたちに実業界の支持、しかし彼らの政治的味方たち、社会党員たちの敵意を有効である、政策である。三二年以来、諸政府は、彼らの政策の多数派ではない。諸内閣は、彼らの政策と多数派の見解の間に解けない矛盾の中で取られて、倒れる。それは、一般に、崩壊を引き起こす、経済的及び財政的措置について社会党の棄権あるいは反対である。この小さいゲームで、急進党員たちは、継続的にあらゆる彼らのリーダーたちを擦り減らす。アメリカ人たちに対して、戦争の負債の支払期日を決済するように提案しながら、三二年一二月に、倒れるように選ぶ、E＝エリオの後、人々は、相次いで共和社会党員ポール＝ボンクール、次いで、三三年一月と三四年一月の間に急進党員たち、ダラディエ、A＝サロー、C＝ショータンを崩壊するのを見える。この時期の間に、経済恐慌の苛酷さで苦しむ、フランス人たちは、不振に対してすべての解決法を予測するように禁じる、これらの政治的ゲームを支える。確かに最初のリーダーに対して、政権の座にある急進党を打撃を与える、強力な反議会主義の流れは、発展する。狙われる問題は、この際、議会よりもっと少なく共和国である。そして、議会は、長い年月以来、議会が、一連の政治的＝財政的スキャンダルの理由であるだけ一層多く告発される。国会議員たちに反対して叫ばれた、無能力の非難に対して、現在、腐敗の非難は、付け加わる。

信用を失わせられた制度　経済的困難の時期は、同様に政治的＝財政的スキャンダルの時期であることは、驚くように理由がない。これらのスキャンダルは、財政界が、政治的職員のメンバーたちの役割を享受する、利害関係のある保護を明らかにする。国民連合政府の下に、多数がある。航空郵便スキャンダル、ウストリック事件、等。

・三三年末、突然起こる、スタヴィスキー事件は、政治的利用の事実から当然、最も有名である。スタヴィスキーは、すでに詐欺師の長い経歴を持っている。政治家たちの馬鹿正直さを利用して、スタヴィスキーは、重要な国会議員たち（急進党員たち、G＝ボノオール Gaston Bonnaure、R＝ルノー René Renault のように）の弁護士たちのように選んで、政権

の小径の中で、多くの巧妙さで浸透する。スタヴィスキーは、他の人々に対して、信頼を吹き込むため、ある人々を利用するし、彼に任務を容易にする、支持あるいは推薦で恩恵を浴するため、政治的職員の軽はずみあるいはぞんざいに賭ける。従って、実は、三二年に、彼は、急進党員ガラGaratで、贋の宝石に担保で保証された債券が、起債する、公営質屋の事件を仕組む。急進党大臣、ダリミエは、バイヨンヌの公営質屋の債券に応ずるように、保険会社に推薦して、通達を署名する。三三年一二月二四日、警察は、二億フランの総額のため、金庫の贋の債券を起債したように告発された、この事業所の所長ティシエ Tissierを逮捕するし、続いて起こる、数日の中で、捜査官たちは、保護者たちとスタヴィスキーの支持者たちの手続きをさかのぼる。スタヴィスキーは、自殺する前に、三四年一月八日、シャモニクスのシャレー風の別荘の中で、逃げる。

・従って、それは、政治的スキャンダルである。スタヴィスキー事件は、直ぐ前のスキャンダルよりもっと大きな重要性を帯びることはなしである。しかし、急進党のある国会議員たちあるいはジャーナリストたちの妥協は、新聞に対して、事件を目立たせるように、及び彼らの敵たちに対して、スタヴィスキーが、急進党の出資者であったことを確認するように認める。彼は、従って、スキャンダルの中で全部の妥協を見付けられる。A＝タルディユーは、彼が、スタヴィスキーで妥協で非難する、自分に急進党政治家たちの気絡れな名簿の出版の特殊性を作る。アクシオン＝フランセーズ紙は、三四年一月の急進党会議の議長、C＝ショータンについて、彼の攻勢を指導する。スタヴィスキーが、彼の訴訟の相次ぐ一九の軽減の恩恵を浴したことを観察して、同紙は、C＝ショータンの義理の兄弟、検事総長プレサール Pressardが、詐欺師を作るため、従って、首相を保護するように願ったことを、結論する。王党主義の機関紙は、三四年一月一〇日、見出しを付けるのにためらわない。『一団の泥棒たちと暗殺者たちのリーダー、C＝ショータン』。そして、恐慌によって苛立たせられた世論の不安、諸政府の無力及びスキャンダルの暴露に賭けて、機関紙は、一月九日から、パリ人たちに『泥棒たちを倒せ！』の叫び声で、夕方自体、ブルボン宮の前にデモをするように来るのに招待しながら、制度に反対す

る攻撃を発する。三二年以来、フランスが、よく知っている、政治的危機は、議会制度の疑問視に通じるし、共和国に反対する攻撃のように、同時代人たちに現れる、問題の第一のレヴェルで、フランスが、知っている、政治的危機の直接の成果、すなわち、諸団体の活動は、現れる。

諸団体の発展とフランス＝ファシズムの問題

諸団体の時期　フランスの政治史の中で、諸団体は、新しい現象ではない。人々は、諸団体を、一八八〇年代から、すなわち、大衆（労働者の世界と都市の中産諸階級）が、一九世紀末の変化を考慮して、政治的ゲームの完全な当事者たちになる時、発展するように見える。諸団体の出現は、必要に答える。経済的変化と制度の危機に際しては、伝統的政治諸勢力は、不完全に、当然別の異議の諸形態の方に向く、住民の熱望を表現する。何よりも先ず、権力を行使するのを狙うし、全体の計画を国に対して提案しなければならない、諸政党と違って、諸団体は、自分が、正確な要点について、街頭の中で、議決を押し付けるのに決定された、及び議会の枠を拒否して、直接な行動のグループであることを願う。第三共和制は、従って、二度繰り返して、第一次大戦の前に、諸団体を創られるのを見えた。一八八二年に、アルザス－ロレーヌの復讐と再征服の精神によって、実は、愛国者同盟は、創られる。世紀末で、ドレイフュス事件の重要な危機は、左翼で、訴訟の再審を考慮して人権同盟、右翼で、フランス祖国同盟あるいは反ユダヤ同盟を生まれるのを見える。しかし、三〇年代の諸団体の新しい性格、それは、強権的な意味の中で、制度を変えるように意思及び中央と南ヨーロッパが、二〇年代の間に所有する、強権的諸制度、そして、特に、ファシスト制度が、諸団体について行使する、引力である。

二〇年代の諸団体、伝統主義かあるいはファシズムか　二四－二五年に、実は、諸団体の最初の波は、両大戦間の間に、現れる。その波は、左翼連合の政権の座への到達に対応する。波は、同時に右翼の世論の一部の不信と左翼の政策の恐れを表す。人々は、世紀の初めの反聖職者主義への復帰と在郷軍人たちが、戦った、愛国的理想の再疑問視を酷く恐れる。三つの団体は、これらの年月の中で、生まれる。最初の団体の目標は、連合の反教権主義の軽い気持に対して反対するよ

うである。全国カトリック教連盟＝ドゥ＝カステルノー de Castelnau 将軍（二一年）。第二のグループ、愛国青年団（二四年、P＝テタンジェ、伝統的民族主義グループ）。第三のグループ、アクシオン＝フランセーズ（〇五年、『完全な民族主義』、王党派闘士団（〇八年））。それに反対して、フェソー団（二五年一〇月、G＝ヴァロワ）。彼の夢想、民族主義とサンディカリスム（急進的労働組合主義）の総合を実現すること。イタリアのファシズムは、彼に従うべきモデルを提供する。全国カトリック教連盟は、カトリック教の世界の政治的及び社会的計画について、組織及び反省に献身する。愛国青年団は、ポワンカレに戻る。これらの二つのグループは、三〇年代の初めに常に存在するし、恐慌、しかし特に三二年に左翼の選挙の勝利は、二つのグループに新しい青少年を与える。フェソー団については、ヴァロワは、政権の座への右翼の復帰に少しも抵抗しない。彼の出資者たちによって放棄された、彼は、二六年秋で深遠な危機をよく知っているし、二八年にフェソー団の解散まで衰える。

三〇年代の諸団体　二四年に同様に、三〇年代の中で、政権の座への左翼の復帰は、街頭の中で、権力に反対してあるいは在来の制度に反対して直接行動を導くのに当てられる、諸団体の急激な増加を優遇する。古い諸団体に対して、二つの異なった流れを引き合いに出す、新しい諸団体は、付け加わる。

・伝統的な民族主義から、実は、火の十字架団は、生じる。二七年に創られた、火の十字架＝古参兵連盟は、偉功のために引用された、前線の古い戦闘員及び傷痍軍人連盟である。その目的は、同時に連盟のメンバーたちの間に助け合いを活気づけること、及び塹壕の精神を延長することである。多数の在郷軍人たちは、理想を防衛するために政治的行動の方に導かれる。彼らは、政治家たちを、彼らの無能によって、大切な預かりものの完全さを危くするよう非難する。そして、非難は、三二―三三年に同様に二四年に、左翼が、政権の座にいる時、特に有効である。従って、実は、二四年から、全国戦闘員同盟は、政治家の分野の中で、その介入を『市民の行動』として名を付けるし、三二―三三年に、『民族的利害が、係わりがある』ことを、再び評価する。この領域の中で、火の十字架団は、非常に先に進む。三〇年以来、彼らの新

しい議長、ドゥ＝ラ＝ロック中佐は、団体に対して、軍事的組織を与えた。彼は、戦闘及び防衛の諸グループ、待命中の軍人たちを募集する。彼は、『火の十字架息子及び娘団』に対して、諸グループの募集を広げる。彼は、最後に、火の十字架団の理想を分ける、及び国民義勇兵たちのグループを形成する、すべての人々の加入を受け入れるよう決定する。恐慌で、火の十字架団は、国の社会的条項の民族主義的綱領に、外国の競争に反対する国民的経済の防衛を、及びフランスの労働力の保護を、税の負担の軽減を、投機と詐欺に反対する闘争を、そして経済的活動について国家の独占的支配の批判を組み合わせる。ラ＝ロックが、反共和主義のあるいはファッショ的な内容を与えるのを拒否して、充分なものとして評価する、漠然とした綱領。しかし、綱領のぼんやりした及び電気のように素早い性格のように、火の十字架団を、極右の諸団体の間に最も強力な動きを作り、三四年頃におよそ一〇万人の加入者たちを引き付ける、綱領。実際、ドゥ＝ラ＝ロック大佐の大きな野心は、最も大きな規律の中で、彼の軍隊を行進させることである。戦略上の物知りの行進は、この参謀本部の旧士官を喜ばせる。この点から見れば、彼の傑作は、三四年二月五日、火の十字架団の二つの縦列によって、内務省の『包囲』である。ドゥ＝ラ＝ロック大佐の共和主義的態度の表明にも拘らず、世論は、これらのゲームの無実に信じない、そして支持者たちと敵たちは、彼にフランスのムッソリーニを見える傾向がある。

・それに反対して、続いて起こる、二つの団体に関して、ファシストの思い付きは、何の疑いを作らない。フランシスム団は、三三年九月に、香水販売業者コティの旧協力者とヴァロワのフェソー団の外人部隊の旧指導者、M＝ビュカールによって、創設された。その目標は、権力の獲得、議会主義の廃止と同業組合の代表制の配置である。定員数は、些細なものである。運動は、単に、イタリアのファシズムのかなり平らな模倣である。それは、なお、J＝ルノーを目撃された、彼が、主宰する、フランス連帯団を、三三年に、創設する、コティである。もし組織の目的が、非常にぼんやりしたならば、構造は、制服等で軍隊の倣ったタイプで、自転車とオートバイで伝令のグループである。フランス連帯団の独創性の一つ。北アフリカ支部の募集。しかし、フランシスム団と同様に、フランス連帯団は、運動のデモに参加する、人々に払

い込まれた補償金によって引き寄せられた失業者たちの間に募集して、数千人の加入者たちのグループの外には、決して存在しなかった。三〇年代の間に、この諸団体の急激な増加によって提起された問題は、われわれが、ファシズムのフランスの形態の前にいるかどうかを知ることである。

フランスのファシズムの存在について討論　この討論は、討論が、その外の面（様式、語彙、行動主義、軍人たちの分列行進のための好み）によってより少なくその目標によって、行使する、明白な引力で同様に、ファシズムで与えるのに定義について支配する、非常に広く不確実性から生まれる。討論は、多数のフランス人たちが、感じる、国民的頽廃の感情と対照となる、活力の感情を与える。概して、アメリカ人R＝J＝スシィあるいはドイツ人E＝ノルテのように、多数の外国の歴史家たちは、ファシズムを、両大戦間のフランスを揺り動かす、不十分に保守主義で識別する、定義を、ファシズムで与えるのを目指す。彼らの議論は、諸団体とファシズムの間に、明白な相似にその基礎を置く。

・ファシズムと相似は、支持者層、目的、組織の様式、行動の方式と手段にその基礎を置く。支持者層に関して、フランスの諸団体の支持者層は、経済恐慌によって関係された三〇年代のフランスの中で同様に、直ぐ第一次大戦後のフランスの中で多数である、大勢の不満家たちの中で募集される。もし労働者たちが、代表されるならば、それは、彼らの身分規定が、二〇年代のインフレーションによって同様に恐慌の結果によって、再疑問視されたし、そこで多数である、中産階級のメンバーたちである。それは、制度に対して、その消滅の責任を帰属する、黄金時代を、第一次大戦前を懐古する人々である。諸団体の支持者層は、政治的生活の平凡さによって失望された、在郷軍人たちの支持者層である。この点から見れば、諸団体の新規加入者たちは、彼らの社会的生まれによって、諸ヨーロッパ＝ファシズムの支持者層とは少しも違っていない、及び彼らの動機は、事実上近いことは、真実である。諸団体に加入する、あるいは彼らの行動に拍手喝采する、これらのフランス人たちは、何を願うのか。国民的頽廃に与えられた止めの一撃、国に対して、主導権を返す、立て直し、及び経済恐慌に反対する有効な行動の可能性。これらの動機は、無能、腐敗及び退嬰主義の制度を支持された、

議会共和制の批判に、そして強大な権力に対して、漠然とした熱望に通じる。これらの思想が、少しもムッソリーニに見える、イタリアの大衆を活気づけた、思想とは違っていない、ということを認識しよう。全体主義の性格の制度の知覚は、二二年にファシストたちの政権の座への到着を承認した、人々の多数派のために全然存在しなかった。結局は、もし諸ファシズムの有効が、諸団体の環境の中で予約されるならば、及びもし諸団体が、明白な実例を構成するならば、指導者たちは、外国のモデルが、元のままに模倣され得ないで、国民的天才への適用が、少なくとも必要になるので、諸団体を着想を得ることが、問題であることは、直ぐ付け加える。なお、組織の様式のレヴェルで相似。諸団体は、頭で募らせられた崇拝を実践する。カリスマ的な力を持った人物、頭は、絶対的権力を持ち、主権的に命令と指令を与えて、目的と戦略を固定し、及び不服従を少しも大目に見ない。人物描写は、ラ＝ロックのような人に同様にテタンジェのような人に、及びビュカールのような人にあるいはコティのような人に有効である。イタリアに打ち勝つ、『ムッソリーニは、常に正しい』、あるいは三三年後ドイツに、ヒトラーが、勝利させる、総統原理で、類似点は、大きい。しかし、諸ファシズムの無条件の模倣が、あるいは恐慌の状況で、確固として棒を保持する、及び合衆国にローズヴェルトのような人のカリスマを証明する、隊長を後ろに避難するように意思が、問題であるのか。なお、彼のリーダーの周りに崇拝、政治的諸勢力の働きの様式に興味を抱く、社会学者たちによって主張された現象を活気づけるのを、すべての組織の傾向が、問題であるのか。なお、諸団体とファシズムの間に典礼と祭式のレヴェルで相似。諸団体は、行動のグループを与えられながら、軍隊に倣った構造を互いに与える。火の十字架団にあっては『待命中の軍人たち』、愛国青年団の『機動性のあるグループ』、フランス連帯団のように別のグループの中で『担当者たち』。諸団体は、物知りの道程が、彼らの敵たちが、事実上のクーデタの突撃隊を見たように説明する、軍隊の前進を想い起こして、制服、分列行進、伝令、トラックに軍の輸送で、軍隊の型の策略の好みを持っている。最後に、方法のレヴェルで相似。諸団体の選挙の領域は、大衆的デモをより好まれた、諸団体の表現の手段が、彼らの敵たちとあるいは機動隊と衝突に通じて、街頭である。諸団体の行動主義は、同時に、共和国

が、無秩序を支配させるように、及び勢力が、未来の秩序の保証であるように証明するのに当てられる。たとえ、団体から団体まで、及び世代の間に諸団体の各々の内にニュアンスを与えることに意見を一致するにしても。いずれにしても、これらの共通の特徴の全体は、各ファシズムが、その国民的特殊性を持ち、諸団体が、ファシズムのフランスの形態であったように考えるままにしたことは、理解され得る。結局は、フランスが、ドイツとイタリアの構造に比較できる社会的構造を持ち、同じ諸問題、すべての保持された規模（戦争、第一次大戦後の困難、経済恐慌）を蒙り、これらの二つの国の運動に比較できる運動を知り得たことは、どのように驚くのか。

・ファシストの浸透。現象に関心を抱かれた、フランスの歴史家たち、特にR＝レモンとR＝ジラルデは、フランスの社会の中で、反議会主義の、強力な権力への熱望の、政治的組織の軍隊に倣った面のための好みの、政治の考え方の中で独善主義の、直接行動への傾向の、これらの現象の実在を承認する。R＝ジラルデは、『漠然としたファシズム』のこの話題に話す。しかし、彼らは、これらの基本要素の全体は、ファシズムを構成するように異議を申し立てる。彼らは、単純にファシズムに、民族主義的及び伝統主義的右翼の後継者、ボナパルト主義の遠い昔の相続人のように見える。ある意味で、西ヨーロッパの国々の住民たちに対して、共通の不安は、ドイツにあるいはイタリアに、新しい運動を生じさせたであろう。フランスに、不安は、ヨーロッパのファシストの諸運動の新しい衣服を着た、国民投票の右翼の古い流れを活気を取り戻させることは別の結果ではなかったにしても。そして、R＝レモンは、諸ファシズムと諸団体を区別する、問題を強く主張した。これらの最後の諸団体にあっては、強い保守主義の及び伝統主義の浸透は、ファシズムの位階制度の転覆の意思と対照をなす。フランスの諸運動の中で、社会的、軍事的あるいは宗教的エリートの敬意は、諸ファシズムの意思の遠隔地に対して、新しいエリートを作り出すように見出される。諸ファシズムの中で、民族主義の欲求不満は、運動の欠くべからざる部分となるし、ドイツに敗北を説明するし、イタリアに『手足を切断された勝利』を説明する。最後に、起源のファシズムは、全体性のように思い付かれた人民の名において、表現されるように要求する。全体性は、原理

を仕えて人間を編入する、全体主義的制度の未来の中で、創設への助言であり、人々が、これらの総括的なヴィジョンよりもっと喜んで国民的伝統に参照される、意味をはっきり示すフランスの諸運動の中で、何らの程度で見出されない、傾向がある。結局のところ、この問題について勉強した、フランスの歴史家たちの全体は、もし三〇年代の困難によって揺り動かされた、住民のある分派の中で、ますます異議を申し立てられた議会の伝統から離れた、制度の強権的な形態に有利な潜在性が、存在するならば、これらの潜在的性質は、少しもフランスのファシズムの形成の中で具体化され得ないことを、評価することで意見が一致している。実際、ファシストの道の中で、これらの分派を捌き得る、大きな運動は、逆に、伝統的民族主義（愛国青年団あるいは火の十字架団）を引き合いに出して、フランシスム団あるいはフランス連帯団のイメージで、自分が正確にファシストであることを願う、人々は、政治的文化が、ファシズムに縁のないままである、国の中で、非常に制限された聴衆を持っている。三〇年代の政治的危機の頂点、三四年二月六日の暴動は、当時フランスの社会を揺り動かす、異議の諸運動の性格を明らかにするであろう。

啓示者、三四年二月六日の危機

血に染まった暴動　三四年一月二八日、三三年一一月以来任地で、内閣総理大臣C＝ショータンは、辞職する。極右が、スキャンダルに対して、内閣総理大臣の名前に係わらせるように試みし続けたとはいえ、それは、その原因である、スタヴィスキー事件ではない。時折、フランス連帯団、愛国青年団によって、更には、一月末以来、納税者連盟によって補強された、アクシオン＝フランセーズによって、街頭の中で組織された、ほぼ日常的な騒乱に直面させられた、一二月以来、彼に反対して、反対が、繰り広げる、ゲリラによって消耗させられた、ショータンは、より引退するのを好む。三二年一二月以来、それは、倒れる、第五次政府である。制度が、息を切らしている、感情は、皆に是非必要である、そして、三三年以来、実業界（フランス再建団、炭鉱委員会、商業会議所）の中で、及び反対の政界（納税者連盟、右翼新聞社）の中で、人々は、三二年の国政選挙以来、在来の多数派の崩壊を予言する。後に左翼新聞が、それを確認するように、陰謀の準備

か。これ以下、確かなことはない。もっと単純に、為替相場の危機が、『債券の受取人たちの国民投票』、金融恐慌及びR＝ポワンカレによって導かれた、国民連合政府に場所を残す、二四年国政選挙から生じた左翼の多数派の崩壊を引き起こす時、二六年七月に状況との類推によって、諸事件の予想が、問題である。本当に、この先例で、実は、急進党員たちの避けられない崩壊が、予想を立てる、演説者たちあるいはジャーナリストたちは、引き合いに出す。経済恐慌で、彼らは、今度は、救済の激発を期待する。ポワンカレが、病気になって（彼は、三四年秋で死ぬであろう）、人々は、訴えの役割を演じるため、彼の委任の目的以来、取り戻された、旧共和国大統領G＝ドゥーメルグの名前を宣告する。ショータンの崩壊は、時間が近いように考察させる。この展望の中で、多数の反対の指導者たち（タルディユーとかいう人、ラヴァールとかいう人）は、彼らが、必要なショックの歩兵隊のために保持する、最も極端主義の諸団体によって繰り広げられた、街頭の扇動を興味と一緒に眺める。状況は、内閣総理大臣の辞職の後に、国家元首が、公安政府を考える、及び相次いで、旧大統領ドゥーメルグに、次いで、互いに、逃げ出す、上院の（J＝ジャヌネイ）と下院の（F＝ブィリン）議長たちに訴えるために、充分に動揺を現れる。国家元首は、当時、精力と完全さの評判が、世論を安心させるのに適した、左翼の多数派のメンバー、急進党員E＝ダラディエの方に向く。ダラディエは、一月の最後の数日の中で、急進党員たち、独立社会党員たちで構成された、及び左翼共和派（フランダン＝グループ）と同様にタルディユーの共和中道派の大臣（ファブリ）に対して、中道派の方に広げられた、内閣を形成するのに到達する。個人的に予感された、社会党員たちは、彼らの参加を拒否したので。辛うじて、内閣は、二月三日、警視総監J＝キヤップの左遷が、中道派大臣たちの辞退を引き起こすように、形成される。ダラディエは、スタヴィスキー事件に関する一件書類の伝達の中で、警視総監の怠慢によって、この『異動』を正統化する（彼は、キヤップに対して、モロッコで総督の豪奢なポストを提供した）。しかし、反対と中道派グループの一部は、諸団体に対して有利な、キヤップの追放の中で、政治的性格に属する措置のように見える。力の試練は、突如開始される。首相が、彼の信任を手に入れるために議会の前に現れる日、二月六日、右翼諸団体（アクシオン＝フランセーズ、フランス連

帯団、愛国青年団、納税者同盟、火の十字架団、しかし全国戦闘員同盟と在郷軍人共和連盟（共産党に近い）の在郷軍人たち）は、彼らの加入者たちを、シャン＝ゼリエ大通りについて、コンコルド広場を、議会の周りに、デモをするのに要請する。極端に漠然とした、デモは、一七時頃始まる。非常に早く、衝突は、ブルボン宮に通じている橋を救出するよう試みる、警備係と、その係を仮の弾丸の打撃に対して迎える、デモの間に、コンコルドの広場で生じる。一九時一〇分で、最初の発射は、警備係から飛び出す。従って、デモは、漸進的に暴動に次第に移行する。デモは、午前の二時三〇分まで長続きする。総括は、重い。一五人の死者（デモ参加者たちの間に一四人）と一、四三五人の負傷者たち。七日午前で、ル＝ポピュレール紙は、左翼の公式の解釈になる、問題を確定する。「ファシストの暴力的手段は、失敗した。」右翼は、武器なしで在郷軍人たちを卑怯にも虐殺した、政府を激しく非難するのに。事実、二月六日の危機の分析は、同時にフランスの危機の深遠さを及び一義性の及び一面しか見ない解釈に帰着することはできない、重要な日の複雑さを判断するように可能にする。三四年二月六日は、全体として多様な目的に対して、五つの異なったデモを生じたように、承認する必要がある。

・共産党員たちの二月六日。最初の予期せぬ出来事、共産党員たちと共産党シンパたち、H＝バルビュス、J＝デュクロとジャン＝デュクロ Jean Duclos によって指導された、在郷軍人共和連盟の在郷軍人たちのデモ参加者たちの地位の中で影響力。在郷軍人共和連盟は、彼の加入者たちを、ダラディエ政府に反対して、しかし、スタヴィスキー事件の中で危険にさらされた、全国戦闘員同盟の旧議長、ロシニョール Rossignol に反対してデモをするのに要請する。腐敗した者たちを保護するように非難された、及びその先頭に、在郷軍人たちの恩給を訂正するように提案した、人間を持つように非難された、政府に反対するスローガンを発しながら、泥棒たち、全国戦闘員同盟の指導者たち及び警視総監キャップをごちゃまぜに攻撃しながら、共産党の組織は、その対象が、「統一戦線」戦術の枠内で、その戦術に在郷軍人たちを引き付けることである、異常な寄せ集めを実現する。結局は、在郷軍人共和連盟は、彼の加入者たちに対して、二月六日二〇時で、シャン＝ゼリエ大通りの円形広場で、会合の約束を与えた。連盟の目標は、全然議会ではなく、しかし凱旋門

である。実行段階では、多数の共産党のデモ参加者たちが、結局、別の組織の行列に混ぜられたし、及びコンコルドの橋の周りに、彼らの側で、機動隊に反対して一戦交えられて、事態は、はっきりしない。それは、『一味』によって犯された、及び権力と多数派の政治的諸勢力の追従によって可能にされた、ファシストの暴力的手段を非難するように、全然ユマニテ紙を妨げない。『その酷い破産が、これらの軍国主義的グループの開花と発展に貢献した、『民主主義的』政府、『左翼の』政府の議会、政府の社会党員たちは、真の責任者たちである』と、二月七日、共産党日刊紙は、書いた。いずれにせよ、人々が、三四年二月六日に対して、共産党の参加が、フランスは、知っている、政治的危機を、しかし全然制度に反対して協議された攻撃を保証する、特別の背景の中で、登録することを、正当と認め得ることは、事実である。そのデモが、在郷軍人共和連盟の影響力を引き起こした、全国戦闘員同盟の在郷軍人たちと一緒に、背景は、全く異なっている。

・在郷軍人たちの役割。理論的に無関心な、九〇万のメンバーたちに支えられて、全国戦闘員同盟は、事実、右翼の感受性を持っている。同盟は、三四年に、G＝ルベックによって長を務められる。一月末から、政治的世界を打撃を与える、腐敗の前に疝痛及び嫌悪感の精神への復帰の名において、彼の行動を正当化しながら、ルベックは、極右諸団体によって、月の初め以来、突如開始された反議会運動の中で、全国戦闘員同盟を引き連り込むように要求することは、明らかである。一月二七日、彼は、二月四日のため、キャップの要求に中断された大きなデモを決定する。しかし、警視総監の左遷の後、全国戦闘員同盟の議長は、彼の計画を取り戻し、彼の加入者たちを、六時から二〇時まで、グラン＝パレで、すなわち、極右諸団体の集会の場所の近くに召集する。事実、ルベックは、当局者の眼で、全体として諸団体のデモとは違ったように全国戦闘員同盟のデモを提供して、しかし世論の眼で、二つの団体が、混同されるように見えるようになされて、二月六日、物知りの混乱を維持する。従って、実は、会合の約束の場所の及び諸団体のデモと一緒に道程（コンコルドの方に）の近さを加えて、全国戦闘員同盟の最後の意図について、曖昧さは、付け加わる。ルベックは、彼の集団に対して、ロワィ

ヤル通りの方に向かうように、命令を与える。解散を命令するために、彼は、断言する。しかし、彼は、非常線によってそれに妨げられたであろう。従って、在郷軍人たちの行列は、エリゼ宮の方にサン＝トノレ通りの街頭をまた上がる。別の可能な道で存在しなかった以上、と、ルベックは、断言する。国家元首の傍らに請願を提出するため、彼の補佐役は、主張する。事実、エリゼ宮の周りに、実は、縦列は、縦列が、力づくで乗り越えるよう試みる、非常線に衝突する。以上のことから、ルベックが、負傷される間に、一連の衝突、棍棒での殴打、騎兵部隊の突撃は、起こる。縦列は、最後にコンコルド広場で解散する。在郷軍人たちで、当時すべての所属のデモ参加者たち、特にアクシオン＝フランセーズのメンバーたちは、混じる。従って、そのようなものとして、全国戦闘員同盟は、暴動に参加しなかった、及びその指導者たちは、彼らの行列を手に持っているように作ったことは、明らかである。しかし、暴動の場所について、彼らの影響力は、彼らの固有な行動について強調しながら、二月六日が、彼らの嫌悪感を叫ぶのに来た、武器なしで在郷軍人たちの事実であったことを、確認するようなやり方であったことは、確実である。最後に、実は、念を入れて保持され得た、道程で、ルベックによって作られた選択は、彼が、熟慮の末、機動隊と衝突の危険を受け入れた、考えを補強する。それは、機動隊を信用を失わせるように、及び『酷く不機嫌である』権力のテーゼについて、在郷軍人たちを主張するように認めた。火の十字架団の態度は、全国戦闘員同盟の態度と同様に曖昧である。

・火の十字架団は、合法性を選ぶ。三四年二月六日、前日、彼の集団で、内務大臣を『包囲し』たように自慢した、ドゥ＝ラ＝ロック中佐は、議会の周りに、同じレヴェルの戦術上の示威行動を作るように要求する。二つのグループは、議会に集中するはずである。火の十字架団が、借りるはずである、道程に沿って、団の議長は、作戦の展開で電話によってよく通暁しているため、見張り番を配置した。作戦は、事実上、二〇時四五分頃、対立が、激しくなる、及び人々が、発射し始めるのに、解散の命令を与える、大佐の管理の下に理由がある。諸事件の組織及び管理のこの心遣いは、明らかに、大佐の目的が、全然ブルボン宮を攻囲することでなかった、しかしただ力の示威行動に熱中することであったことを、証明

する。極右と右翼の一部は、将来に対して、ラ＝ロックに、彼の予備軍を非難するように止めないであろう。肝心なことは、もし火の十字架団のリーダーが、コンコルド広場の暴動に加わったならば、彼は、議会制度と結集を付けるように可能であったことを、考える。二月六日の失望した者たちは、タルディユーが、三二年に内閣総理大臣であった時、リーダーを秘密の資金に対して給料を受け取ったように非難されるであろう。しかし、二月六日、火の十字架団のデモは、全体の自主的な要素であるし、コンコルド広場が、舞台であった、暴動と混同されることはできないことは、明らかである。ラ＝ロックによって予測された命令の中で、デモの爆発の唯一の企ては、ピュイメーグル Puymaigre 中佐が、議会を保護する、行列に柵を力ずくで破らせるように空しく試みる時、ブールゴニュ通り及びサン＝ドミニク通りの角で、生じる。

・暴動の集団。もし火の十字架団と在郷軍人共和連盟が、二月六日、自主的なデモで先頭に立ったならば、もし全国戦闘員同盟の運動が、もっと曖昧な態度を持つならば、人々は、それに反対して、三つのグループ、アクシオン＝フランセーズ、フランス連帯団、愛国青年団で暴力を奪うような意思について、最小の疑いを持つことはできないであろう。アクシオン＝フランセーズは、二月六日、議会の前に、彼の加入者たちを召集した。フランス連帯団は、連合の場所として、グラン＝ブルヴァールを固定させる、そして、その場所から、彼の指導者たちは、彼らの行列を、コンコルドに導く。愛国青年団については、市役所の前に、実は、愛国青年団は、パリの選挙当選者たち（テタンジェは、パリの代議士である）に導かれて、議会に赴くため、一九時で、集まるように要求する。肝心なことは、従って、二〇時の周辺に、議会の前に、一月の間に暴動で練習した、定員数が、しかし、われわれが、戻る、役割について、パリの選挙当選者たちが、集中されるように、予測される。結局は、二月六日で識別された、死者の半分と負傷者の大部分は、かなり減らした定員数に対して、これらの三つのグループに所属する。これらの三つのグループの正確な目標は、何であるか。告白された目的が、共和国を倒すことである、アクシオン＝フランセーズに関して、彼の指導者たちは、彼らが、一月初め以来、導く、行動の方向性の中で、彼らが、結局は、君主制の回復に導き得る、制度の不安定の企てに参加するように要求した、二月六日の諸事

件について調査委員会の前に承認するため、いかなる困難を作らない。しかし、目的は、遠いし、二月六日、この目標の具体的な実現のいかなる計画は、存在しない。その政治的分析の大雑把な性格が、すでに強調された、フランス連帯団は、二月六日、重要な役割を演じる、しかし、いかなる手掛かりは、フランス連帯団が、正確な目的を追求するように、考えることは認めない。それに反対して、総合情報局は、フランス連帯団が、三四年初め、愛国青年団の付属物に行動するように思われたことを、注目した。さて、この最後の組織は、二月六日の解釈の鍵になるように思われる。彼の指導者たちは、実際、二月六日、市役所に所在する、パリの選挙当選者たち（テタンジェ、イスナール Isnards 家の人々、ダンディネ d'Andigné）である。ここで、実は、人々は、暴動の神経質なセンターを識別する。

・パリの選挙当選者たちの行動と二月六日の政治的意義。二月の最初の数日から、市会とパリの代議士たちの右翼の選挙当選者たちは、その結果が、精神の持主たちを興奮させることである、パリの住民へのアピールを発する。二月六日、彼らは、市役所に、一九時で、パリの選挙当選者たちに結び付けられた、愛国青年団を召集する。しかし、先行する、数時間の中で、パリのある市会議員たちは、議会の前に興奮の役割を演じる。その理由は、ルベックは、議会に在郷軍人たちを導くし、ピュイメーグル中佐は、ラ＝ロックによって固定された限度のその先に、火の十字架団を引き連り込むよう努力する。もし彼らは、アクシオン＝フランセーズあるいはフランス連帯団が、コンコルドへ突如開始する、暴動を引き起こさないならば、彼らの行動は、暴動に定員数で供給するのを目指す。一九時後僅かしか、彼らのマフラーに囲まれた、約五〇人のパリの選挙当選者たちは、市役所から出発し、愛国青年団の行列で先頭に立つ、そして辛うじて、行列は、重要な日に彼の政治的意義を与える、叫び声、『辞職！』が、反響を呼ぶことを、進み始める。そして、それは、本当に、パリの選挙当選者たちが、議会に要求するようになる、ダラディエの辞職と国民連合政府の任命である。別の言い回しで、人々は、本当に、スタヴィスキー事件とキャップの左遷が、今回、左翼の多数派から離れて、実施の口実に仕えて、二六年のシナリオの面前である。パリの選挙当選者たちの進め方は、混乱した重要な日の政治的意図を照らす。スタヴィスキー

事件とキャップから離れて実施によって引き起こされた、感動を利用して、右翼は、右翼が、組織しなかった（愛国青年団の行動に関して除けば）、しかし右翼が、利用するように要求する、諸団体によって導かれた、暴動を発展するままにして置いた。アクシオン＝フランセーズ、フランス連帯団、納税者連盟、全国戦闘員同盟、更には、火の十字架団と在郷軍人共和連盟は、従って、二月六日、政治的策略に対して無意識の歩兵隊として役立つ。二月六日は、制度に反対して、ファシスト陰謀ではない。先ず最初に、ファシズムが、陰謀に欠けている以上。次いで、重要な日の唯一のはっきりした政治的意図、パリの市会議員たちによって実行された意図の中で、制度は、脅かされない以上。それに反対して、人々は、「市役所の陰謀」、すなわち、その対象が、共和国を倒すことではない、しかし街頭の圧力に基づきながら、権力の座への右翼を再びもたらすため、三二年の投票から生まれた左翼の多数派を終わらせることである、陰謀で話す、ラ＝ロックの決まり文句に賛同できる。それでも、二月六日は、議会共和国の非常に深遠な危機の啓示者である。

議会共和国の危機　三四年二月六日の夕方で、人々は、暴動が、失敗したように承認できる。疑いもなく、流血があった、しかし、制度は、頑強に抵抗した、及び―左翼が、内閣総理大臣の後ろに団結したし―議会に対して、三六〇対二二〇票を集める、ダラディエは、権力の座に留まるのに決定される。しかし、この確かさは、暴動の前に降伏する、及び議会共和国の危機の深遠さを明らかにする、政界、公権力及び制度の反応に抵抗しない。二月六日から七日までの夜の中で、ダラディエは、法務省を検事総長の人柄に、軍隊をパリの軍司令官の人柄に、政府の命令を回避するように見えるし、警察を明白な柔らかさを示すように見える。その結果、人々は、戒厳令を宣言するのに到達できないし、検事総長は、国家の安泰に反対して陰謀のために情報を開くように拒否するし、警察は、暴動を導いた、誰も諸団体の指導者たちを懸念するのに到達しない。七日の午前で、内閣総理大臣は、大臣たち（海軍大臣ギュイ＝ラ＝シャンブル Guy La Chambre、及び三人の若い急進党大臣P＝コット、J＝ミストレル Jean Mistler、L＝マルティノー＝ドゥプラ Léon Martinaud-Deplat）の離脱を記録する。内務大臣、E＝フロ Eugène Frot は、人騒がせな宣言を繰り返す。特に、国家の最も上位の当局者、ルブラ

ン大統領、下院議長、F＝ブイリン及び上院議長、J＝ジャヌネイは、ダラディエに辞職するよう勧告する。致命的な打撃は、ダラディエに同じ勧告を行う、彼に最後にE＝エリオによってもたらされる。L＝ブルムとJ＝ジュオーの唯一の支えは、満足させることはできないであろう。二月七日、彼は、引退する。事実、危機の結果は、議会共和国の責任者たちの共同の辞職によってよりもっと少なく暴動の成功によって、説明される。二月七日は、公権力が、街頭の運動の前に屈服する用意ができたことを明らかにしながら、二月六日は、引き起こす力のないことであったことを、議会共和国に対して、致命的な打撃をもたらした。ともあれ、二月六日は、三三年から企てられた、国民連合の解決法への道を開く。

「休戦」の虚偽の解決法　三四年二月七日、数週間以来想像された、シナリオは、二六年のシナリオを再刊されて、施行される。旧大統領G＝ドゥーメルグは、政府を構成するよう求められるし、二月六日のデモ参加者たちは、彼の邸宅で、議会の闘いのベテランを歓呼で迎えるであろう。彼の政府の中で、E＝エリオと、A＝タルディユーと一緒に、右翼の指導者たちを保障する、幾つかの急進党大臣の側に、P＝ラヴァール、P＝E＝フランダンは、入閣する。右翼は、満足を手に入れた。右翼は、政権の座に戻った。しかし、制度の危機は、だからと言って、解決されるのか。確かに、ノン、そして誰でも、危機を意識している。政府は、誰でも、緊急を見分ける、国家の改革を促進するのに当てられる、「休戦」の内閣として考えられる、最初の政府である。下院と上院は、諸委員会を配置する。肝心なことは、未来の計画の大きな路線について考えを同じくする。自主的な部局を与えられた、真の内閣総理大臣の任期の設立によって、行政権の強化、空文化された、解散権の修復、それらの立法の及び予算の機能に対して、議会の権限の制限。G＝ドゥーメルグは、二月六日後直ちに、皆が、当時承諾する用意ができている、改革を提案しないように間違いを持つ。彼は、逆に、事業の日常的管理への優先権を与え、予算の諸問題の規則に身を捧げ、エリオの急進党員たちに対して、タルディユーによって導かれた、政府の内部に対して、右翼を対立させる、紛争の中で身動きできなくなる。単に、三四年夏の間に、実は、彼は、彼が、秋で極めて重要な特徴を知らせる、国家の改革を準備する。長い間、提案された主な措置の不可避性を承認する、

共和的意見を怖がらせる性質のものである、この資料の中で、何もない。支出の主導権に関して、議会の特権の制限、上院の合致した意見なしで、議会を解散させるように権利。しかし、三四年一〇月に、二月六日の強い精神的ショックは、よく放心しているし、国会議員たちは、熱狂なしで、彼らが、享受する、優勢な権力を再疑問視した、改革を企てる。更に、ドゥーメルグは、選挙当選者たちを不快にさせた、彼の強権体制の犠牲者であり、彼は、彼の権限の本質的な役割を奪ったように見られる、上院の憤慨を引き起こしたし、特に、彼は、彼が、彼の国務大臣タルディユーに与えた、辛うじて隠された支持によって、彼に反対して、急進党を立てた。彼の唯一の力は、政府の崩壊を続いて起こった、政治的欠員に直面して、世論の恐怖にその基礎を置く。さて、三四年一一月初め、民主同盟議長、P＝E＝フランダンは、彼のアラースの演説の中で、急進党員たちと一緒に、新しい多数派を構成するように、彼の意図を知らせる。それは、直ちに急進党員たちによって倒された、ドゥーメルグ政府の非難である。その政府と一緒に、結局、もはや四〇年まで、問題ではない、国家の改革の計画は、埋葬された。フランスの政治的危機は、従って、解決法なしで留まる。ドゥーメルグの後に、政治的構成が、外見は、同じ構成である、しかし議会の多数派の鍵を保持する、急進党員たちが、比較にならぬ程にもっと重要な役割を演じる、国民連合の別の諸政府は、構成される。フランダンの政府（三四年一一月―三五年五月）、次いでラヴァールの政府（三五年六月―三六年一月）。これらの休戦の政府は、デフレーションの伝統的な諸方法に従って、危機を管理するよう、及び中道派と右翼に対して、しっかり急進党を固定しながら、制度を強固にするよう努力する。それにも拘らず、三四年秋で、急進党は、この党の内部で、人民戦線への有利な運動を画かれる。その結果、『休戦』は、政府の諸政党の内部で、政治的諸闘争の一時的な妨害の気骨より別の気骨がない。三六年一月に、ラヴァールの崩壊後、休戦は、政治的意味を欠く、決まり文句への場所を残す。唯一の対象が、三六年の国政選挙の準備である、及び結局、選挙の決着の就く日を期待しながら、すべての現実の権威を欠かれた、強い急進党の優位で、A＝サロー政府。その結果、二月六日のショックの後、人々は、三三年の状況に戻った。主導権なしで、経済恐慌に直面された、麻痺された政府。そして、制度の未来

は、諸制度の危機に対して、知的及び精神的危機、すなわち、極端主義の方に逃走より別の展望の国を奪う、価値及び政治的原理の危機が、付け加わるだけ一層多く脅かされたように見える。(三)

四　三〇年代のフランスの知的及び精神的な危機

多分、三〇年代に対して二〇年代、同時代人たちは、真の断絶の感情を感じたらしい、そして経済恐慌及びその社会的結果は、この認識の中で、重要な役割を演じた。もし第一次大戦後は、生活をする喜びの時間及び平常に復帰の幻想の時間であったならば、不景気は、『気遣いの年代』の楽天主義に終止符を打つ。作家R＝ブラジヤック Robert Brasillach は、『第一次大戦後の目的』を想い起こしながら、三一年に仕向けられた調査を結論する。経済的困難と失業のドラマが、別にすれば、人々は、実際、これらの年月は、制度の中で深い信頼の喪失によって、自由主義の美徳について一般化された懐疑的態度、政治的思想の危機によって、更には西欧社会でよりよく確立された価値（自由主義、進歩、人間で信頼、個人の優位性）の再検討によってマークされることを、確認する。同時代人たちは、従って、文明の危機、自由主義的社会の根拠自体を元に活用した、危機を意識していた。いずれにせよ、この問題視は、経済恐慌の前に、その根源を見出すことは、事実である。経済恐慌は、二五―二六年以来、すでに潜在的な知的危機を明らかにさせる。

文明の危機あるいは国民的頽廃か　三〇年代は、唯一の共通点が、西欧文明の批判である、著作を開花するように見える、前兆となる。事実、状況の二つの異なった分析に行き着く、悲観主義の刻印を帯びられた確認。一方では、その世界が、産業革命の起源以来、発展するように、西欧世界の危機である、問題は、他方では、もし人々が、フランスをその隣国あるいは別の工業国で比較するならば、単に、国民的衰弱の形態である。

確認、文明の危機　批判は、一般的である。文明は、物質的進歩の調査について、しかし個人の開花を犠牲にして、あ

らゆるその努力を集中させた。三二年に、道徳と宗教の二つの根源、という、哲学者H＝ベルグソンの最後の偉大な書物は、現れる。その書物の中で、彼は、確認する、人類によって完全に実現された巨大な物質的な進歩は、全然精神の同一の進歩を伴っていない。彼は、それによって、結論する、充分な精神的発展がないので、人類は、その技術的進歩の重みの下で押しつぶされるし、新しい戦争に導く、精神なしで工業化をよく知っている。ベルグソンにとって、それは、従って、西欧文明の危機を説明する、道徳と技術の間に不均等である。それは、三一年に、現在の世界について視線、という、出版しながら、P＝ヴァレリが、作り上げる、殆んど同一の確認である。彼は、そこで、その固有な創造を支配するのに、巧みな人の無能を告発する。しかし、彼にとって、それは、道具を創らせながら、知性に貨幣あるいは機械を逃れる、危うく対象し損ねた、知性である。それは、従って、ここで、西欧文明の危機を報告する、人間の知性とその固有な創造の非常職な言動の間に、隔たりである。この危機は、新しい時代の通知として、見分けられる。しかし、直ちに、未来の展望は、恐ろしいように思われる。そのように、G＝デュアメル Georges Duhamel は、アメリカの文明（三〇年、未来の生活の舞台）の中で、来るべき社会の予示を見る。政治的世界の中で、不合理等の侵入の前に、アランとかいう人の恐怖。そして、それは、P＝ランジュヴァンとA＝ベエイエ Albert Bayet を、決定論の古典的な法則を再び問題として取り上げる、科学的なあるいは哲学的な新しい傾向を戦うため、合理主義同盟を創設するのに導く、同じレヴェルの反射的動作である。すべての側で、三〇年代の初めのこのフランスの中で、思想家たちは、多様な哲学的な原則を引き合いに出して、西欧文明が、建てられた、人間主義の古い価値の崩壊を知らせる。この感情は、国民的頽廃の一般化された自覚の形態の下に、表現される。

確認、国民的頽廃　・国民的衰弱。二五―二六年から、フランス人たちは、彼らの国が、結局は、国の生存を脅かす、衰弱の時期の中で、入ったことは、納得される、彼らの住民たちが、紛争後、数年、フランスを見るように、フランスと、フランスが、ベル＝エポックに存在した、問題の―理想化された―思い出の間の比較は、この認識を強化する。戦争は、

もはや黄金時代への復帰を許さない。戦争は、今後、順応する必要がある、深遠な及び取返しの付かない変化を引き起こした。人々は、正常に復帰を期待した。やって来ない。人間主義の価値の崩壊の考えに対して、三〇年代の中で、戦後の社会が、ベル＝エポックの、完全な想定された状況に比べて、頽廃の状況を表す、確信は、付け加わる。この苦い確認は、勝利の陶酔の後、先ず初めに、紛争の人口に関する価格のかなり正当な措置にその基礎を置く。戦争は、人間の生活に高く付いた。住民は、その活力を失ったし、もはやその更新を保証しない。三〇年代のフランスは、ヨーロッパの残りに比べて、人口に関する衰弱が、フランスを停滞で脅かすことは、意識している。文学、新聞、政治的職員の一部は、この感情を繰り返し伝える。フランスは、もはやヨーロッパに、時期の大きな危機を立ち向かうような力を持たない、老人の国である。これらの条件の中で、フランスは、新しい紛争を危険をさらすことはできない。フランスの市民たちの精神の中で植え付けられた、この考えは、ほぼ根深い平和主義を維持する。以上のことから、フランス人たちを、勇壮さのすべての誘惑から離れる、及び右翼の作家たちによって、アペリチフ及び竿釣りのフランスの平凡さを糾弾させる、生活の単純な喜びを享受するような意思がある。疲れ、消耗、危険の拒否、戦争及びその人口に関する効果の結果、そのようなものは、フランスの衰弱の最初の徴候である。別の徴候は、国際的レヴェルについて、フランスの役割の発展を読まれる。二〇年代の初めのフランスは、ヨーロッパに彼の法を押し付けて、フランスが、思いを懲らした、極めて厳しい平和を敗者に命じ得ないように激怒して、勝者の国であった。三〇年代のフランスは、今後、フランスが、国際的な唯一の大きな政策を追い求めるようにできないことを、知っている。二三―二四年に、ルール占領は、同盟諸国の協定なしで、フランスが、ドイツに反対して、力の政策を導き得ないことを、証明した。その理由は、フランスは、最後に、交渉を余儀なくさせた。更に、フランスは、三一年に、一年の予定で、戦争の賠償及び負債の支払を中断する、フーヴァー＝モラトリアムに、次いで、三二年に、フランスが、三二年にルールを占領した、これらの賠償の決定的な放棄に同意するはずである。三〇年代の初めで、エリオとブリアンは、国が、解放される、資力の弱さを及びその住民たちによって感じられた、疲れ

の感情を考慮に入れて、現実主義の政策より別の政策で何もなかった、ヨーロッパに、この調停の政策に忠実のままである。三〇年代のフランスは、フランスが、過去の中で、運命を作り得たように、もはやヨーロッパの運命にのしかかることはできる状態にないことを、ぼんやりと感じる。衰弱の感情は、同様に、国の内部の生活に関して、宣告される。金の蓄積と貨幣の安定に建てられた、フランスの富は、住民の眼で、紛争の間に蒸発した。確かに、二六年の『ポワンカレ安定化』は、一瞬、正常に復帰であるように思われたし、フランス人たちは、ポワンカレ＝フランにある愛着を表した。もっと悪いことである。戦争と戦後の年月のインフレーションは、貨幣の安定の原則、中産諸階級のイデオロギーの基礎の一つを破産させた。考えは、今後、直ちに彼の利益を利用する必要がある、従って、未来は、不確実であることは、優勢である。しかし、直ぐさま、それは、一九世紀以来、その存在理由とその結集力の主な要素を構成した、進歩の中で希望するようにそれらの理由を消滅するように見える、中産諸階級の全体である。経済的不景気によって強化された、中産諸階級の信頼の危機は、制度それ自体の社会的基礎を脅かす。共和国の社会的約束の再疑問視と一緒に、それは、打撃を受けられる、制度の信頼性である。

・制度の問題に戻すこと。第一次大戦後一〇年、自由主義的民主主義は、もはや勝利を得たこの制度ではない。それは、未来なしで、内閣の不安定が、壊れ易さを証明する、弱い体系である。その民主主義は、市民たちに対して、市民たちが、燃えるような必要を感じる、保護を提供できる、ゆっくりと国民を次第に弱らせる、危機を解決するため、独創的な解決法を見出しできる状態にもはやない。従って、自由主義的民主主義諸国の無能力が、政治的制度の問題に実施を引き起こす、及びある人々が、結局、諸体系によって引き付けられることは、避けられない。この点から見れば、ファシスト＝イタリアとスターリン主義のロシアは、フランスのケースに対して、反モデルを提供する。疑いもなく、人々は、これらの国が、人間の諸権利を作る、否定を嘆くし、人々は、フランスが、これらの外国の実例を模倣することはできないように、考察する、しかし、肝心なことは、そこで、フランスの国民的衰弱を故障させることはできる、新しい解決法を提案する

ため、それらの実例の思い付きを見出す。頽廃の感情は、従って、立て直しの意思を伴う。そして、西欧文明の危機で同時に国民的衰弱で、収容するように許した、独創的解決法から解放するように、熱望は、いかなる解決法が、伝統的な政治的イデオロギーの兵器廠の中で、描かれないだけ一層多く強力である。諸政党は、大きな知的怠惰を示し、国が、必要とする、この活力を着想を与えるように不可能であることを示す。それは、実際、危機を理解するのに政治的考えの無能力程に、フランスに、精神的及び知的危機の極めて重要な面の一つである。

伝統的な政治的諸イデオロギーの危機　三〇年代の初めで、フランスの大きな政治的諸勢力のどれも、多分、共産党を除けば、この原理的危機によって、真に容赦されない。共産党は、世界的経済を襲う、不景気によって党の分析の中で、確認されたように見られる。世界的経済は、マルクスによって予示された、及びブルジョワジーの支配の終末を知らせる、資本主義の重要な最終的危機ではないのか。そして、共産党に対して、それは、資本主義の内部の諸矛盾が、従って、それらの結果を感じさせる、時期に、ソ連邦に、第一次五カ年計画を適用されるかどうか、偶然ではない。その計画は、実際、ソヴィエト国に対して、新しい世界の建設が、始まることは、知らせないのか。結局は、その計画は、はるかに、この分析は、共産党員たちの唯一の事実であったことは、気にしない。多くの知識人たちは、同じ結論に達する。人々は、そこで、この党が、悪魔の化身であるため、すべての人々を奪う、急激な恐怖のように、三〇年代の中で、共産主義によって行使された、魅力の理由の一つを見付ける。しかし、もし愛する共産主義と反共主義が、非常に強力のように思われるならば、それは、伝統的な政治的諸勢力は、左翼に同様に右翼に、フランス人たちに提供するのにいかなる解決法を持っていないことである。

フランス社会党の危機　・諸・矛・盾。フランス社会党は、三〇年代の中で、党が、党の誕生以来、よく知っている、曖昧さの余波を蒙る。党を諸階級なしで社会を取って代らせるため、ブルジョワ国家を倒すのに決定された、〇五年に、革命的マルクス主義党として創設された、党は、J＝ジョレースの刺激の下に、この理論的目標と実践的社会改良主義の間の

総合を作り上げるよう試みた。この意味で、人々は、党に議会共和国を都合を付ける、選挙のゲームを演じる、諸事実の中で、フランスの政治的社会の内部に同化するように見られた。この基本的な矛盾は、具体的な行動のいかなる規則に理由を与えない、及び社会党を政権の座からほど遠いままであるのを余儀なくさせる、修辞的な巧みな方法と比較して、解決される。ただ会議の思弁は、態度の曖昧な性格を包み隠す。トゥール大会の二〇年の分裂後、党は、革命のレーニン主義の実践を拒否しながら、革命政党という確認されるように続けられた、及び政府に参加しないという条件で、急進党員たちで選挙同盟の同じ歩調で受け入れて、党の戦前の路線を維持する。どのように、いかなる論理が、明確にするのに達しない、同様に対立した態度に留まっているのか。採択された路線の理論的根拠に自問するように避けながら、現実と対立を逃げながら。これらの条件の中で、フランス社会党は、結局、両大戦間の年月の間に、驚くべき原理的動脈硬化で襲われたことを、確認されることが、驚くべきではない。フランス社会党は、一九世紀末あるいは二〇世紀初めから始まる、ゲードあるいはジョレースの著作を再刊するように留める。ただ理論的研究、レオン＝ブルムの研究は、常に社会党員たちを訊問する、権力の執拗な問題について、従うべき戦術に基づく。二〇世紀に固有な諸現象について、反省の欠如の中で、もはや驚くべきように当たらない。それらの現象は、合衆国に（J＝モックあるいはCh＝スピナスのように、党の経済に、ある専門家たちだけは、そこに興味を抱く）、大量生産と消費の新しい現象、イタリア＝ファシズムの誕生あるいはソヴィエトの計画化が、問題である、社会党活動家たちの関心を決して引き起こさない。同様に、二〇年以来、社会党の歴史は、何より先ず、戦術上の及び選挙の術策によって吸収された、及び参加の問題に直面された、党の議会グループの歴史である。二四年以来、党の鼓吹者レオン＝ブルムと党の書記長P＝フォールは、ブルジョワ政府の中で、政権の座にある参加の拒否を押し付けた。この態度は、三二年に、党の幹部たちの多数派の支持と一緒に、再確認された。それにも拘らず、この『参加しないで支持』の曖昧さを告発する、社会党議員たちは、多数である。その議員たちは、彼らの革命的な政見発表にも拘らず、社会党が、改良主義的な組織であり、党が、国政選挙に勝利を得た左翼の多数派を、切望された拒否に

よって、麻痺する代りに、政権の座にある責任を受け入れながら、その結果を引き出すように大きな時間であることは、評価する。P＝ルノーデルに、リーダーを見付ける、この態度は、経済恐慌の悪化によって強化されるであろう。労働者階級が、不振の結果を蒙るのに、フランス社会党は、党の会議で忙しい、消極的になるままであることは、党は、受け入れられるのか。三三年初め、ヒトラーの政権の座にある到着は、再び、問題を提起する。党の伝統的な平和主義に忠実な、社会党は、敵が、ナチズムである時、国防の予算を可決するよう拒否し続けるはずであるのか。それは、初めて、三三年に、予算を可決する、国会議員たちの多数派の意見ではない。しかし、七月に、党の書記長、P＝フォールに唆されて、社会党大会は、議会グループを非難する。政権の座にある参加の問題は、三三年に、党の非常に深遠な危機の原因である。

・『新社会党員たち（ネオ）』の分裂。この危機に、原理的討論は、付け加わる。党の動脈硬化は、新しい道を探し求める、多数の知識人たちの不満を育む。要点は、二八年から、このテーマについて反省に専心する、社会学者M＝デアの事実である。三〇年に、彼は、彼が、マルクス主義の原理のかなり重要な改訂を提案する、社会主義の諸展望という標題を付けられた書物の中で、彼の研究の果実を引き渡す。この社会改良主義は、社会学的である。プロレタリアートが、資本主義によって搾取された唯一の階級ではない、しかし、それは、中産諸階級の場合であることを考慮して、彼は、社会党に対して、お互いの防衛を保証するよう示唆する。社会改良主義は、デアが、マルクスと違って、その資本主義の管理の要素及び利益の、次いで所有の社会化のモーターを作るため、資本主義で解体するよう要求する、国家の考え方に基づく。これらの提案は、レオン＝ブルムの厳しく非難するような沈黙に、及び原理の擁護者たちを構成する、ノール県連盟のゲード主義者たちの激しい批判に衝突する。デアは、それでも、彼の態度を固くする。彼は、彼が、提案する、反資本主義的連合は、国民的枠内に確立されるため、国際主義を放棄するはずであるし、反恐慌及び反ファシズム闘争の本質的要因は、権威を備えた国家であるはずであるように、強調する。デアの別の弟子、B＝モンタニョンは、ファシズムの中で、社会主義を見えるように宣言するのに、デアの弟子、A＝マルケは、三大項目『秩序、権威、国家』によって、三三年七月の

社会党大会で要約する、問題。人々が、『新社会党員たち』を呼ぶ、人々は、党が、受け入れることはできない、フランス社会党に対して、恐るべき大きな争点を提起する。レオン＝ブルムは、彼が、『新社会党員たち』の思想の中で、見分けることを評価する、ファシズムの痕跡によって、自分が『恐怖に襲われた』と表明するし、三三年秋で、フランス社会党の全国評議会は、彼らの思想を分けないで、ルノーデル、ラマディエあるいはコンペール-モレルのように政権の座にある参加を望む、ある数の国会議員たちと同様に、デアと彼の弟子たちを除名するよう決定する。これらの離党者たちは、間もなく社会主義共和同盟の中で合併する、新しい党、仏国社会党-ジャン＝ジョレース同盟を作り出す。『新社会党員』の分裂後、社会党の原理的危機は、元のままである。たとえ、それは、何故なら、その内部に、三人の大学人たち、党の原理的動脈硬化について、分裂主義者たちのある人々の批判を分け合う、歴史家G＝ルフラン、経済学者R＝マルジョラン、民族学者Cl＝レヴィーストロースによって活気づけられた、建設的革命というグループが、存続するであろうと。

急進主義の危機　曖昧さ。社会党の危機と同様に、急進党の危機は、ほぼ慢性の性格を帯びる。その現実が、地方委員会、あるいは、最もよく、県連盟である、非常に地方分権化された政党、急進主義は、選挙当選者たちにあるいは指導者たちに重要な術策の幅を残す、非常に大きな多様性を、この組織に負うている。疑いもなく、E＝ダラディエは、彼の党に対して、もっと首尾一貫した構造を与えるよう、及び原理について相対的な合意を引き起こすよう試みた。しかし、彼は、単に、この任務の中で非常に不完全に成功した。三〇年代の初めで、急進党は、自分が左翼の政党であることを願う。彼は、そちらに、彼の反動的な及び聖職者の敵たちに反対して、共和国の勝利のために、闘争の時期の思い出に対して、忠実に留まることを要求する。左翼であること、それは、急進党員のため、第三共和制が、議会共和国を制定したように、議会共和国で忠実になる、政教分離の問題について頑固さを示す、『共和派的規律』に、すなわち、国政選挙の時、左翼に立候補者取り下げに切望されたままである、及び社会的レヴェルについて、小土地所有者の拡張に導く、漸進的な社会改良主義を受け入れることである。最後に国際に関して、それは、国防を排除しなかった、平和の意思で証明するこ

とである。急進党的な原理は、一九世紀の農村のフランスの価値である、価値を媒介伝達する。戦後の困難の前に、その原理は、順応し難いように見えるし、社会党員たちと同盟の政治的意思と、社会党の思想から離れた、自由な本質の経済的及び社会的構想の間に、明白な矛盾を解決するのに害を及ぼす。その結果、会議が、繰り返し伝える、左翼の宣言、活動家たちをうっとりさせる、宣言と、急進党員たちを右翼に及び実業界に近づける、権力の実践の間に、隔たりは、隔たりが、恒常的な危機の要素になるようなものである。

・青年トルコ派の動き。党の衰弱で正当化された感情で、実は、二七―二八年頃、若い急進党員たちあるいは青年トルコ派の動きは、生まれる。急進主義を改革する、急進主義を戦後のフランスに適用する、選挙の戦術について思想を優勢させることを要求する、若いパリの知識人たちのグループが、問題である。そのグループは、J＝カイヨー、E＝ロシュの側近によって創られた新聞、声紙あるいは共和国紙の周りに集まるし、間もなく若い代議士たち、P＝コット、P＝マンデース＝フランス、J＝ゼイ、G＝リウ Gaston Riou、G＝ポテュ Georges Potut……が、加わる、B＝ドゥ＝ジュヴネル、ジャーナリスト、J＝ケイゼェル、J＝ミストレェル……のような人たちを集める。彼らの思想は、政治的レヴェルについて、多様である。ある人々は、フランス社会党あるいは『新社会党員たち』と、左翼連合の支持者たちである。別の人々は、集中、すなわち、穏健派と中道派の連合をより好む。幾つかの人々は、『フランス風のファシズム』を願う。しかし、これらの差異のその先に、青年トルコ派は、三つの軸の周りに、急進主義の改革について考えを同じくする。行政権を強化するよう及び諸会議の代議制の性格を改善するよう許す、国家の改革。国家の指導部あるいは、せめて、管理によって、無条件な自由主義からかすめ取る経済。最後に、フランスとドイツが、要となるものを構成する、連邦の西欧に構成によってヨーロッパの平和の維持。社会党と違って、急進党は、党の改革者たちを除名しない。われわれは、逆に、E＝エリオが、改革者たちを名誉で満足させる、改革者たちを、党の指導部の内部に、場所を提供する、三一年の急進党大会が、彼らのテーマを取り戻すとも受け入れるように見えた。しかし、彼は、本当に、『青年トルコ派』という思想で、

三二年のキャンペーンのために選挙の綱領の基礎を作るよう用心するし、それは、本当に、この日付で急進党員たちの政権の座にある就任で打ち勝つ、伝統的急進主義の思想である。その結果、二月六日の直後に、それは、党の指導部に反対して指導された、激しい攻撃がやって来た、若い急進党員たちである。その攻勢は、公然と、急進主義の深遠な危機を明らかにする。

政治的カトリック教の原理的危機　二つの大きな左翼の政治的諸勢力と同じやり方で、人々が、一般的に右翼で分類する、階層は、諸イデオロギーの危機によって、容赦されない。カトリック教の政治的表現から始めて。カトリック教たちの告白の構成単位は、政治的選択のレヴェルでいかなる一貫性を引き起こさない。少数派は、青年共和国同盟、あるいは、社会的レヴェルについて、急進主義でかなり近い、議会共和国と隠健な社会改良主義の支持者たちに切望された、キリスト教民主派を集める、二四年に創られた、小さな民主人民党に従う。カトリック教の世界の非常に大きな多数派は、共和的、保守的及び民族主義的連盟のように、右翼にマークされた、政治的諸組織に従う。これらの最後の組織について、完全な民族主義のチャンピオン、アクシオン＝フランセーズの王政主義者たちは、明白な引力を行使する。Ch＝モーラスは、カトリック教の世界の大部分のため、政治的なものではなく、知的指導者のように思われる。カトリック教徒たちと極右のこの政治的及び知的同盟は、アクシオン＝フランセーズの思想の教皇の非難によって、二六年八―九月に、結局、急激に断ち切られたであろう。事件は、ローマの除外の前に、抵抗なしで屈服しない、カトリック教の世界の内部に深遠な危機を引き起こす。しかし、反抗分子たちに反対して、司教の内赦院の教皇庁によって取られた、制裁は、不誠意を遣り遂げる、二九年から、カトリック教徒たちについて、モーラスの影響力は、はっきりと衰える。極右と彼の関係から解放された、若い知識人たちによって引き起こされた、カトリック教は、新しい政治的な道の調査の方へゆっくりと発展を開始する。三〇年代の中で、転覆が、問題であるのではなかった。過去によって同様に、カトリック教徒たちの多数派は、共和連盟から始めて、右翼の政治的諸組織に対して忠実なままである。エコー＝ドゥ＝パリ紙の編集記者、ドゥ＝カステル

ノー将軍の権威の下に、全国カトリック教連盟は、カトリック教の選挙民を右翼に維持しようと努力する。しかし、幾つかの哲学者たちの周りに、真のカトリック教の知的復活は、行われる。本質的な役割は、この領域の中で、旧アクシオン＝フランセーズのメンバー、トマス説の哲学者、J＝マリタァン Jacques Maritain によって演じられる。都市の政治的生活の中で、キリスト教徒は、キリスト教徒として、及び政治家としてではなく振舞うはずである。この開始は、若いカトリック教徒たちを、政治的領域の中で、キリスト教の態度が、意味できる、問題を再検討するに至らしめる。改革者たちの思想の中で、最も意味をはっきり示す事実は、キリスト教の社会的秩序が、もはや大革命より以前の事態の秩序の復活を意味しない、しかしある人々が、「確立された不秩序」を呼ぶ、問題に、秩序と正義の取り替えを意味することである。例えば、この展望の中で、実は、E＝ムーニエ Emmanuel Mounier は、三二年に、エスプリ誌を創設する。「人格主義」は、自分が、背中合わせに、資本主義とマルクス主義が、存在する、唯物論の及び生産本位主義の諸イデオロギーを拒否して、同時に「虚偽のファシストの唯心論」のために、利益と嫌悪を感じて、反自由主義的、反資本主義的、反唯物論的であることを願う。これらの若いカトリック教徒たちは、もはや「革命」の言葉によって怖がらせられない。彼らは、全国カトリック教連盟の型の圧力諸集団を横切って、伝統的行動の諸様式と縁を切るように願う。カトリック教の意見は、従って、伝統的諸イデオロギーの再問題視のこの動きによって、容赦されない、及び若い世代によって企てられた、新しい道の調査は、ゆっくりと彼らの果実をもたらす。しかし、単に、第二次大戦後、実は、この流れは、開花するであろう。

右翼の政治的危機　右翼界は、三〇年代の原理的危機によって関係されるし、診断は、伝統主義的右翼に同様に右翼に有用である。

・自由主義的右翼に関して、危機は、深く、古典的自由主義の美徳の中で、信頼を着手する、危機は、経済の古典的メカニズム及び調停の伝統的道具の有効性を、再び問題として取り上げる。そのように、同業組合主義の考えあるいは国家の諸機関によって、経済の動向は、昨日、最も控え目な界の中で活動の場で前進する。議会主義の配置、すなわち、自由

主義的右翼の偏愛の制度は、なおもっと意味をはっきり示す。最も押された批判は、A＝タルディユーの批判である。彼の首相の経験は、彼に、彼の真の役割を行政権に再び与える、諸制度の改革の不可避性を確認させる。ドゥーメルグ内閣に彼の参加の後、タルディユーは、行動的政策を放棄するし、彼の思想を考慮に入れてキャンペーンに捧げる。人々は、彼を、当時、国民投票の使用、共和国大統領への解散権の授与、婦人たちの投票、防衛に関して議会の主導権の廃止……を防衛するように見える。彼は、一連の著作の中で展示する、諸計画。しかし、われわれが、左翼にあるいはカトリック教徒たちにあって遭遇した、別の改革者たちのように、タルディユーも同様である。彼の思想は、単に、狭い少数派の利害を提起するし、心底から危険に政治的諸伝統に忠実になるよう、自由主義的右翼の人たちの多数派を妨げない。

・共和連盟が、共和的制度への適用の形態を代表した、伝統主義的右翼の側で、危機は、この指導部から離れた、原資料への復帰の意思によって現れる。アクシオン＝フランセーズの離党者たちの周りに、一括して、フランス大革命の経験とその遺産を拒否する、及び純粋にアンシャン＝レジームの組織と価値を回復するよう提案する、率直に、反動的な流れは、生まれる。モーラス主義者の思い付きのこの『若い右翼』は、J＝P＝マクザンス Jean-Pierre Maxence によって指導された覚書誌（一八―三一年）あるいはフランス雑誌（二〇―三三年）等々のように雑誌の中で、表現される。これらの多様な雑誌は、民主主義に対する、資本主義に対する、国家の政教分離に対する敵意を、もし人々が、アクシオン＝フランセーズの無秩序の扇動の例外をなすならば、危機は、妥協のすべての議会的態度から遠くに、ドレイフュス事件の結末以来、活動を休止している反共和的伝統主義を再生させるように証明する、地方の、職業の、宗教のフランスを回復するような意思を、媒介伝達する。左翼から極右まで、人々は、共通の主要点を注目できる。再疑問視の諸運動は、知識人たちの制限された及び少数派の諸グループの事実である。諸運動は、真に大多数の世論を、しっかりあるべき場所になる、支持する諸機関を食み出さない。諸運動は、特に、国民と支配的諸イデオロギーの動脈硬化をかむ、抜け目のない危機に直面して、更新の道を探し求める、人々の間に深い混乱を明らかにする。あらゆるこれらのグループの特性は、組織された

大きな諸組織の航跡の中で、生まれる及び発展することである。さて、平行して、そして多分そこで、実は、知的危機の深遠さの徴候を見付ける必要がある、人々は、政治的諸機関を除けば、新しい道の調査を強さを表現する、興奮を目撃する。[四]

――九三―一一―三〇、成稿――

（一）Cf. Serge Bersteim, La France des années 30, Armand Colin, Paris, '88, pp. 5-23.（セルジュ＝ベルスタァン『三〇年代のフランス』アルマン＝コラン社、パリ、八八年。）諸資料は、五〇年振りで公表された（国家文書、県文書、市町村文書、等々）。Cf. Ib., pp. 173-174. S＝ベルスタァンは、現在、パリ第一〇大学―ナンテールの現代史教授であり、パリ政治研究所の教授である。なお、Cf. Serge Berstein, Histoire du Parti Radical, 1. La recherche de l'âge d'or, '19-'26, 2. Crise du radicalisme, '26-'39, Presses de la Fondation nationale des Sciences politiques, '80 et '81. S. Berstein et Milza, Dictionnaire historique des fascismes et du nazisme, Editions complexes, Bruxelles, '92, etc. 同様に、Cf. Michel Winoch, Les années trente, De la crise à la guerre, Ed. du Seuil, '90, etc. 拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、二九、三五―三七、四一―四三頁等参照。

（二）Cf. S. Berstein, La France des années 30, o. c., pp. 25-51. 表、フランスに工業生産の指数、フランスの恐慌の面（・幾つかの農業の製品の生産、収獲高及び物価、・対外貿易、・工業生産、・卸の物価）、生産された自動車、フランに比べて英ポンドの価値、三〇年代におけるフランス人たちと貨幣、国家の予算の進展、額面、購買力、名目賃金及び生活費及び経済恐慌の犠牲者たちの苦情。Cf. Ib., pp. 26, 29, 30-31, 32, 36, 39, 45, 46, 49, et 50. なお、中木康夫他『現代ヨーロッパ政治史』有斐閣、九〇年、一五一―一五二頁、原輝史『戦間期フランスにおける経済組織化構造―マルシャンドゥ法案（三五年）をめぐって』、『社会経済史学』五六―二、九〇年、九二頁参照。いずれも、月日は、明示されていない。拙著、前掲書、二七、三一―三七頁参照。

（三）Cf. Ib., pp. 53-77. 〇一年から三五年までの急進党、三二年（五月一日）の国民議会議員選挙の第一回投票で票の配分、・登録者投票人―一、一五六万一、七五一人、・有効投票―九五七万九、四八二票、保守派―八万二、八五九票、共和連盟派―一二三万三、三六〇票、左翼共和派―一二九万九、九三六票、人民民主派―三〇万九、三三六票、独立急進派―四五万五、九九〇票、独立穏和派―四九万九、二三六票、右翼―三八八万〇、七一七票、左翼独立急進党派―五〇万〇、〇〇〇票、社会党急進派―一八三万六、九九一票、社会党共和派と独立社会党派―五一万五、一七六票、フランス社会党派―一九六万四、三八四票、共産社会党派―

七万八、四七二票、共産党派－七九万六、六三〇票、左翼－四八九万五、〇二三票、三二年の議会、左翼－社会党急進派一五七名、社会党共和派三七名／フランス社会党派一二九名、共産社会党派一一名、共産党派一二名、計三四六名、穏和派－左翼共和派七二名、人民民主派一六名、独立急進派六二名、計一五〇名、保守派右翼－保守派五名、民主共和同盟派七六名、独立派二八名、計一〇九名、E＝エリオ（一八七二－五七年）、ファシズムは何か、二月六日のデモのためのアピール、Cf. Ib., pp. 55, 56-57, 60, 66 et 71. 拙著、前掲書、三七－四六、四七－四八頁等参照。

（四）Cf. Ib., pp. 79-90.『M＝デア（一八九四－五五年）』、『急進主義の危機、青年トルコ派の批判』Cf. Ib., pp. 84, 88. 拙著、前掲書、五八－五九、七三－七四、四一－四四頁等参照。

付記

（一）主要参考文献は、Cf. CHIRM, Les luttes des mineurs de '40 à '44, n°47, '92, Histoire des droites en France, sous la direction de Jean François Sirinelli, Paris, '92 (3 volumes, Tome 1:Politique, Tome 2:Cultures, Tome 3:Sensibilités), etc. である。

（二）筆者は、今年、CRHMSS, Université de Paris I, Bulletin n°16, '93（パリ、九月二四日発信）を寄贈されている。フランス人民戦線の時期は、九二年中で二二種（博士論文六種、修士号論文一六種）である（メートロン資金－著作集、Cf. Ib., pp. 57-101、八〇－九一年ＣＲＨＳＭＭに公開審査に臨まれた修士号論文と博士論文のカタログと索引、Cf. Ib., pp. 106-128、等）。合計、外国で八六六種、国内で一、〇七八種、合わせて一、九四四種である（九三－一一－三〇現在）。